
ホストクラブ「Y a m a t o - n a d e s h i k o」

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホストクラブ「Yamatoneadeshiko」

【Nコード】

N4852D

【作者名】

y

【あらすじ】

世界有数の繁華街――不夜城neo-新宿。neo-歌舞伎町随一のホストクラブ「Yamatoneadeshiko」を舞台に、様々な魅力を持ったトップ・ホスト達とハイソサエティな客達が繰り広げる華やかな夜の遊戯（BL要素はありません）また、夜の世界設定は20年前です。イラストなどをサイトに掲載しております <http://fr5jwdac3.x.fc2.com/aaa/index/hosutotop.html>（PC対応のみ）

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」(前書き)

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」

世界有数の歓楽街・ネオ新宿歌舞伎町――

その華やかなる一画に、周囲の絢爛たる店々を圧する店構え――
ネオ歌舞伎町一のホストクラブ「Yamato-nadeshiko」

美しきセレブ女性達の、金だけでは埋められない心の隙間を慰める、
美しき男達の集う夜の宮殿

「いらつしやいませ！」

夜の帳が降り――ネオ歌舞伎町一のホストクラブ「Yamato-nadeshiko」には次々と高級な毛皮やスーツに身を固めた美しい女性客が来店する。総在籍数100人を越えるホスト達が整然と並び頭を垂れ来店の感謝を一齐に上げる。このクラブは完全な会員制であり、全ての客が俗にセレブと呼ばれる――資産家の妻であり、また会社経営者、高級ブティック経営者・オーナー、IT投資家・株式投資家――つまりハイクラスな女性のみが入会・来店を許される随一のクラブであった。周囲の安いクラブなどのように初回プライスなどありえず、勿論一見の客などは入店は不可能。また資産家の両親やパトロンなどがついてくる客であっても、自身がこの店の品格に相応しくないと判断されれば即入会を取り消される――この不況下にこれだけの盛況を保っている理由はそういうことであった。選ばれた人種であると特権意識を持たせ、莫大な資産を投資してでも手に入れたいと望む資本主義社会の欲望のカラクリ。そして何よりも在籍しているホスト達のレベルの高さ――この店は決して過度な香水や下品に肌を晒す服装・安価な装飾品などは許されない。総指名ポイント10位以下のホスト達は髪を伸ばす

ことすら許されず、最も男性の容姿が誤魔化せないスキンヘッドを義務付けられている。それでも彼等はそれに従う。他店などとは比較にならない破格の給料、そして礼儀作法・指名ノルマの最も厳しい「Yamatō-nadeshiko」で一年続けられればどこかの店に行っても通じるその知名度、そして何よりも最高の太客（よき金を多く落とし長く通つてくださる金持ちの客）を掴むにはこの店は最適なのだ――

彼等は誤魔化しの効かないスキンヘッドを一行に並べ、たった今来店した清楚なスーツに身を包んだ未だ若い女客を出迎えた

「こんにちは・・・翔さん^{ショウ}は出勤されてますか？」

スキンヘッドの一人にそう問う若い女性。その年若い年齢はこの高級店には少々の違和感があったが、服装も立ち姿も育ちの良さを感じさせる。良家のお嬢様という風情だった。スキンヘッドの一人がにこやかにその白い手を取って笑顔で応えた

「いらつしゃいませ！ 弥子様！ お待ちしておりました！ 翔さんもずっとお待ちでしたよ。さあお席に御案内致します・・・」

そう席に案内される清楚な女性を、ステージの影から見詰めている若いホストがいた

「翔さんも人悪いツスね・・・あんな純真そうな女の子を大分通わせてんじゃないスカ」

スキンヘッドのボーイが若いホストにかからかい半分に話しかけた
「人聞きの悪いコト言わないでくれる？ 僕は女性を騙そうなんて思ったこともないよ。彼女にはちゃんと無理しないように来てねって言つてあるさ。まだ店外もしたことないしね。可愛いお嬢さんだから大事にしてあげようと思つてるの。ほら早く飲み物持つてよ。僕少し他のテーブル回ってから行くからさ・・・少し待たせた方が女性は嬉しいがってくれるものだよ・・・あ、ピンクのソルティだからね」

慌てたようにボーイは飲み物を運んでいった。品のいい紫のスーツ

を細身の体を際立たせるように着こなし、銀の刺繍を入れたシャツがその白い肌を引き立たせている若いホスト——彼の名は翔。この「Yamato-nadeshiko」のNO.3。その女性と見紛うかのような整った容姿と、女性の母性本能をくすぐる明るく饒舌なトークで入店一ヶ月で10位以内にのし上がった実力派のホストだった。またジョーズ風美形を好む若い女性だけでなく、柔らかな笑顔と時折見せるそのクールな表情も年齢層の高い女性客に非常に評判が良かった。この店では10位以下は一人前とは認められない。未だボーイ扱いであるスキンヘッドが翔に礼儀を尽くしているのは当然であった。

> i 1 9 6 3 — 3 2 2 <

「あれ？華火さん？どーしたの随分つまんなそーだね？」
ハナカ

店内を見回すように音楽に合わせて歩いていた翔が一つのテーブルに座っている女性客に声を掛けた。長い黒髪に個性的な重ね着のフアッション。勿論それは一目で高級品と分かる服装。若く、目鼻立ちのはっきりしたかなりな美形だ。彼女は憚然とソファに深く足を組んで座り、ヘルプであろうスキンヘッド達の差し出すバーボンソーダを指先であしらっていた

「翔君！ちよつといつになったら黒男は来るのよ！私はアイツが会いたいつてメール寄越したから今日の稽古早めに切り上げて来てあげたのに・・・アナタここ座りなさい！こんな格下達に私の相手させる気？」
クロオ

笑顔で翔はその女性客の隣に座り、おろおろとしているヘルプ達を下がらせた

「そーだよねー<劇団四屋>のトップ女優のヘルプにはNO.3の僕じゃないとダメだよねー」

その甘えてくるような笑顔に彼女は少々の怒りが収まったのか、テーブルからバーボンソーダを取るとぐつとあおった

「ちよつとちよつとそんなにペース上げちゃって大丈夫ー？」

その長い黒髪にそつと手をあて、翔が嗜めた

「うるっさいわね！大体黒男ってホストっぽくないのよね！全然私に気を遣わないし！いっつもアイツの都合ばかりで・・・言葉遣いだって敬語なんて全然使わないし・・・」

「じゃ、僕に乗り換える？」

華火と呼ばれた女性客は翔の端正な顔が至近距離に近づいているのに思わずグラスを取り落としそうになったが、ふいとその顔を背けた
「・・・アナタねえ・・・ホストの世界は永久指名制でしょ・・・そりゃアナタが黒男とNO.3を争っているのは知ってるけど・・・」

「華火さんが僕に乗り換えてくれたら僕のNO.3も確定出来るんだけどな」先月はあつちがNO.3だったからね。もう何ヶ月も入れ替わりで中々落ち着かなー」

「オイ、NO.4様のご登場だ」

いきなり翔の高い声とは正反対の低く深い声が頭上から届いた

「俺様の大切な華火に近づくんじゃねえよガキ」

> i 2 0 4 6 — 3 2 2 <

翔と華火が視線を向けると、ソファの後方ー信じられない位の大男が立っていた。黒のスーツに黒のシャツ。小さなサングラスを掛け、その黒一色の衣装に浅黒い肌が益々男性的な雰囲気を実際立てていた。粗暴であり荒々しい雰囲気を持つそのホストは翔とは全く正反対だった

「やあ、おはよう黒男・・・どうしたのまた寝坊かな？遅刻は15分毎に罰金だよ」

黒男と呼ばれたホストは翔の軽口を聞き流し、身を屈め華火の細い顎に手を掛けぐっと上げさせーそのサングラスをずらした

「お前と逢いてえってのはホントだぜ華火・・・ホラこの瞳が嘘ついている色か？」

先程の翔のように華火の顔に至近距離で近づき黒男は珍しいカラーコンタクトをいれた紅い瞳でじっと見詰めた

「なっ・・・遅いのよ！」

「ごめんな・・・お前稽古忙しいみてえだからメールとかもあんましちまったら集中力切れちまうかもって俺なりに心配してたんだぜ・・・50周年記念公演の主演だろ？お前みてえな若い女が主演なんざ初めてなんだろ？」

「そ、うよ・・・毎日不安で・・・難しい役なの・・・私一人で観客が要望する役を何役もやる実験的な夢芝居で・・・」

「だから息抜きさせてやろうって思ってたメールしたんだよ・・・だがな、久しぶりにお前の顔見れるって思ったらどの服にしようか迷ってたな・・・お前の服のシュミは個性的だからよ？妙なカッコしてお前に嫌われたくねえーどうだ、似合ってるか？お前が俺のイベントにくれたスーツだぜ？」

華火の顔は紅潮し、先程までの怒りの雰囲気は消え失せていた。翔は黒男の大柄な体を避けながら溜息を付く

「俺のスーツのサイズなんざ滅多にねえもんな・・・お前が一生懸命選んでくれたんだろ？嬉しかったぜ・・・」

「じゃ僕これで。可愛いお客様お待ちなんです」

翔はソファから立ち上がり退出の言葉を発する

「おうじゃあな。華火はお前みてえなガキには興味ねえんだよ。気が強そうに見えるがな・・・<男>ってモンを感じさせるヤツに包まれてえ女なんだ。ガキはかーわいいお嬢ちゃんのお守りしてな」

黒男は空いたソファにどかりと座り、翔にかかいの言葉を投げかける

「格下に女性の扱い方をご教授頂けて僕幸せだよ」

「・・・！」

黒男の眉が上がる。二人はここ数ヶ月順位を争っている。それは僅差で何度も入れ替わるものだったが、現在は翔の方が順位は上なのだ。そう言われれば厳正なる規律を尊ぶこの「Yamatona deshiko」において逆らうことは許されない

「ね、え・・・ごめんね・・・翔君に座らせて・・・」

だがそこは実力派のホストである。女性客の不安げな声を察し、相

手好みの笑顔を浮かべトークを行う。彼の内心は煮えたぎる思いではあったが

「何言つてんだよ。なあ・・・お前の公演ぜってー見に行きてえからよ、イイ席用意してくれな・・・」

そう女性客の黒髪を再度撫で、その雰囲気はクラブ全体の優雅な喧騒の中に紛れていった――

優しい傷（前書き）

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

優しい傷

週末のクラブ内は満員御礼、様々な喧騒と音楽と光り続けるホストや客達――

「弥子ちゃん おまたせ！」

「きゃっ？」

ステージに近いテーブルに、カルーアミルクを白い手に遊ばせながら一人ぼつんと座っていた女性客の顔を後ろから手で目隠しをするように、翔は声を掛けた

「ああ・・・びっくりしました。翔さんこんばんは」

「もーなんでいつもヘルプ断るの？他の店みたいに怖いヤツなんていないでしょこのクラブは・・・勿論僕がそんなこと絶対にさせないけどね弥子ちゃんに」

弥子と呼ばれた女性――柔らかそうな肩までのストレートの髪、非常に華奢な肢体に淡いピンクの清楚なスーツを身にまとっているがその年齢はかなり若いだろう。その可愛い容姿には一種あどけなさが残っている。大人の社交場であるクラブ内の雰囲気になんか後れを持って居るのだろうか。頬を少々赤らめながらこくと一つ頷く

「だって・・・他の男の人と何をお話していいかわからないし・・・

」

隣に座った翔の笑顔を見上げながら申し訳無さそうにそう呟く

「お話するのは僕らなんだから、弥子ちゃんはそんなに気を遣わなくていいんだよ？もーホントに君は可愛いね」

ドリンクとフルーツの追加をボーイに指示し、翔は弥子の手を取った

「どしたの？この指の傷・・・」

余りにも自然な流れで手を取られ、それを振りほどこうなどと思わせない笑顔で質問してくる

「あ、ちよつと猫ちゃんにひつかかれちゃって――」

弥子という女性客は、かなりの資産家の令嬢だった。勿論仕事などする必要は無い。だがその素直な性格と博愛精神で父親が多額の寄付をしている動物愛護団体の役員をしているのだった。彼女の動物好きは生来のものだろう。ペットショップなどで売れ残った動物達を安楽死させる――哀しい行為、血統書付きの動物を歪んだ交配をさせ売りさばくブローカーやブリーダー、それらを撲滅させる為の運動なども精力的にこなしているようだった――可憐な外見に似合わず、正義感の強い芯のしっかりした女性だった

「弥子ちゃんの優しい所は僕大好きだけどさ・・・弥子ちゃんの綺麗な手に傷つけるようなコトは僕やだな――僕ちよつと怒ってるかも？」

「えっ・・・ご、ごめんなさい・・・」

弥子は傷を隠すように手を握り、下を向く。全くこのような純情な女性がいかに高級な会員制とはいえ、ホストクラブに出入りするようになったのは、半年ほど前に彼女の父親が連れて来てからだだった。愛護団体の仕事や撲滅運動などに身が入りすぎる真面目な娘を心配し、男友達もいない――最も彼女の周囲には恋心を抱く男性が多数いたが――その娘を一種男性に慣れさせる為に、このクラブのオーナーと経済的な面で知り合いであった父親が少々無理に連れてきたのだ。このクラブの選り抜かれたホストならば、くだらない男は全くいない。その全幅の信頼からオーナーは翔に弥子の相手をするように命じた。彼の容姿は女性に近く、優しい気で若い女性の扱いが手馴れたものだ。黒男などの男性的なホストでは弥子は一目見た瞬間怯えてしまうであろう――

「違うよ弥子ちゃん・・・僕が怒ってるのは弥子ちゃんにじゃなくて、その猫ちゃんに嫉妬しちゃってる僕自身にだよ――分かる？」
初来店で翔の優しい気で明るい雰囲気にも安心感を持ったのか、それ以来彼女は一定間隔にこのクラブを一人で訪れるようになった。勿論父親も了承しているし、嫁入り前の大切な娘に妙な傷をつけないこともオーナーから翔は命じられている。それでもヘルプなどはつけ

ない。あくまでも彼が来るまで彼女は一人で大人しく待っているのだ
「どういう・・・意味ですか？」

きよとんとした大きな瞳で翔を見る弥子の手――微かな傷が付いている細い指を、翔は自らの唇にあてた

「猫ちゃんはさ、弥子ちゃんのこと大好きで甘えて引つかいたんじやないかなあ？僕もその猫ちゃんみたいに弥子ちゃんに優しい傷つけたいな、って思っちゃったからだよ」

翔の柔らかい唇の感触にびくりと身を竦ませた弥子であつたが――
「そのままじつとしていた

「イヤかな？」

真つ赤になつた耳元に唇を近づけて翔は囁く――いつもの軽い口調でなく、正反対の低い声――

「あ・・・あの・・・」

瞳をぎゅつと閉じて硬直する弥子をじつと見詰め――いきなり翔はあははと笑い出した

「あはは！かーわいい！耳まで真つ赤だよ？」

ふつと身を離し、ケラケラと笑う翔に弥子は啞然とし

「かつ・・・からかわないで下さい！」

恐怖よりも――少々の期待を裏切られた女性本来の感情がその可愛らしく怒つたような口調に現れていた。勿論それを見逃す翔ではない

「僕弥子ちゃんをからかおうなんて思わないよ。ただ、ね・・・弥子ちゃんがそう望むなら――俺はいつまでも待っているよ・・・」
再度低い声が、真剣な眼差しが向けられる。「俺」と言つた翔は、常時の女性的な優しい雰囲気は消え去り、冷たい男性的な雰囲気強く放っていた

「・・・翔さん・・・」

頬を染める可憐な女性は握られた手に伝わる熱い感触を噛み締めるように瞳を潤ませていた

「いらつしゃいまーえっ？劉先生・・・?!」

新しい女性客の来店に一齐に歓迎の声を上げようとしたスキンヘッド達が驚いたような声を上げた

「あ、あのー本日ご来店のご連絡を頂いておりましたでしょうか・・・？」

慌て、ボーイ達は胸のメモを必死に捲る。この店は予約制ではないが、殆どのホストが指名が重なることは無論ー劉先生、と呼ばれた女性は無^{ボウ}・2暴の一番の太客であり、来店の際は必ず数日前に連絡をする几帳面な女性だった。それは無論指名ホストの予定を合わせる為でもあるがー

「あらー迷惑かしら？なら帰るわ。タクシーを呼んで頂戴」

地味ではあるが仕立ての良いパンツスーツ、短く刈り込んだスタイリッシュな黒髪。派手さを押さえた薄化粧ーしかしその容姿は上品で知的な雰囲気^{ボウ}に満ち満ちていた。スツと伸びた鼻筋、切れ長の鋭い瞳を、安易な流行とは正反対の高級な眼鏡で際立たせ、その眼鏡を先細りの指で軽く押さえるとーくるりと優雅に身を翻した「どーも。１メーターキス一回な」

引き止めようと慌てるボーイ達の頭上に低い笑気を含んだ声が響きー身を翻した女性客の目の前に金髪の男がぬつと立っていた「三回に値上げすつか？ベストセラー作家の劉丁一先生？」

「タクシーが値上げしたからって、貴方まで値上げする気？暴^{ボウ}」

そうふつと微笑を漏らすと、先生と呼ばれた女性客は形良く整えられた爪をー男の雰囲気^{ボウ}を高める為の不精髭の生えた顎に添え屈ませーベージュのルージュが塗られた唇をフレンチに触れさせた「・・・お客様？目的地に着いたみてえだがどうします？」

「そうねー私の席まで運んでくれる？」

唇を離しー啞然とするボーイ達に一瞥くれ、微笑んだ女性客は金髪のホストに細い腰を抱かれながらテーブルに歩み出した

男と女（前書き）

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

男と女

> i 2 0 7 5 — 3 2 2 <

クールな金髪のアフロヘア、2メートルはあるであろうその背丈。深い蒼の生地には控えめな柄の入ったスーツにその精悍な筋肉が張り出している。小さなサングラス、高い鼻と厚い唇。無精髭の下その厚い唇はある種の女性に倒錯的な想像を施すだろう。非常にNO・4の黒男と酷似している外見ではあるのは、彼等が双子であるからだ。しかし彼は^{ボウ}暴はNO・2をこの一年間明け渡したことは無い。黒男と同じむせ返るような男性的な外見や雰囲気であるが、暴の客層は所謂マッチョを好む層ではなかった。何故なら彼は外見からは想像も付かないほどのインテリであり、アカデミックな仕事や嗜好を持つ女性のトークに難なく連いてくるのだ。時には暇と金を持て余しているハイソサエティなセレブ達よりもその知識は深く。無論客を不機嫌にさせる出しゃばった知識披露などは決してしないが。オーナーなどとは来日する海外セレブの席には必ず彼をつける程であった。幾つかの言語を難なくこなし、深い知識を持ち、更に男性的で思慮深い。この高級クラブのトップ10に居続ける彼の順位は決して揺らぐものではないだろう。

「ラフィットの年代物が手配出来たからよ。今日はもういいんだろ?」

騒々しさを好まない女性客をステージから最も離れた落ち着いた席に促し、暴はボーイが恭しく差し出すラフィット・ロートシルト(高級ワイン。相場は約200万)のラベルを女性客に向けた。

「ええ・・・今日はもうムリ。ネオ・プリンスからの夜景が汚らしくてプロットがまとまらないわ」

女性客——劉丁一。この名称は男性的であるがれつきとした女性で、この名はPNだ。彼女はここ10年大ベストセラーを連発しているハードボイルド作家であり、恐らくその作風から男性的なPNを使用していると思われる。彼女の執筆する小説は殆どが映画化され、昨年の納税額は二ユースで明らかにされる程。昨年彼女の原作で海外のアーティストを主演にした「不夜城の挽歌」はこの映画不況時代下で過去最高の興行収入を得た。また彼女自身が全くマスコミ等に露出しないことも一種神秘的なイメージを世間に与えているのかもしれない。実際は非常にクールで知的な雰囲気を持つ、魅力的な女性であるのだが

「んー・オイ、グラス変えてくれ。埃っぽくて使えたモンじゃねえや」

暴はワインを開け、ティスティングに口をつけたが、そのグラスを後方に控えているボーイの盆に置いた

「もっ・・・！申し訳ありません！ただ今！」

非常に慌て、奥に下がっていくボーイ——勿論騒々しいヘルプなどとは不要だ。クラブの喧騒から離れた一角のテーブルに二人は無言で座っていた。微かな音楽が二人の間に流れる——

「今度の作品は・・・新境地よ。最初から映画化も決まっているし、夏に合わせたの出版社のキャンペーン企画にも食い込む・・・今まで通りのハードボイルドじゃない——恋愛もの、よ」

不意にベージュの唇を開き、珍しい海外の煙草をケースから取り出し、劉は火をつけ吸った。暴は火などつけない。そのようなくない馴れ合いなどは長い付き合いである二人の間には全く必要の無いことだった

「今まではわざとクールに一切の感情を書き込まず、綿密な取材を元に裏社会の実像を描いていたわ——ただ今回は逆よ。あくまでも人間同士の感情をウエットに、叙情的表現を組み込んで、且つ分かりやすく——全く、嫌な企画に乗っちゃったわ」

「——で？俺にオトコとオンナの綿密な取材しに来たのか？貴子」
タカコ

ずい、と身を乗り出し、暴は劉――本名は貴子――に顔を近づけた
「・・・サングラス、外しなさい」

表情を変えず貴子はその大きな顔にあるサングラスに指を掛け――
外した

「綺麗な――瞳ね。本当にイイオトコだわ」

貴子は暴の鋭く深い蒼い瞳をじっと覗き込んだ

「アンタもイイオンナになっちまったなあ・・・出会った頃はホンの小娘だったが・・・イイオンナになった」

唇が触れ合うかのような距離――ただ無言で見詰め合う

「アンタみて――頭のいい女を滅茶苦茶にしてやりてえなあ――
今夜」

武骨な手が滑らかな頬に添えられ、貴子の眼鏡が外される

「オンナの・・・普段と全く違う顔を見てえつつーのは・・・オトコ本来の欲望でヤツだぜ？」

クツクツ・・・と下卑た微笑を浮かべ

「ベッドの上――いや、今ここでもいいぜ？」

「お待たせ致しま――！」

幾重にも重ねられたカーテンの陰からボーイが新しいグラスを持ち現れると、二人はゆつくりと身を離れた

「ありがとな。ん、これならいい。劉先生はフードは要らねえからもう下がんな」

暴は硬直しているボーイからグラスを取り、貴子の前にワインを注ぐ
「なかなかの味ね。去年のは吞めたものじゃなかったわ」

全く動じず、静かにワインを空ける二人に気後れするようにボーイは下がっていった

「・・・成程ね・・・何となく分かったわ。恋愛感情の表現の仕方が」

暫くの沈黙の後――貴子が先程と同じく会話を始める。この二人は非常に長い付き合いであり、公表してはいないが貴子がまだ駆け出しの頃から――裏社会などに取材に赴く時は必ず彼を伴ってい

たのだった。暴の過去はオーナーしか知らない。しかし彼はとある場所ではその筋の幹部連中も道を空け、通常では取材など不可能な人物にもツテがあるのか、取材は驚くほど容易に進んだ。つまり彼は貴子の作品の重要な協力者でもあったのだった。そして彼女自身の才能と努力の結果であろうが、ネオ芥川賞・ネオ直木賞など華々しい経歴は彼の尽力無しには成し得なかったであろう――現在では貴子〓劉丁一の名は売れ、取材なども出版社が全て責任を持って手配する為、暴が彼女の取材に同行するような事は無くなったが――

――過去印税などの交渉を貴子は持ちかけたが、暴は「店にたまに来て、元気な顔を俺に見せてくれりゃいいさ」と明るく言うだけだった

「――そつか。良かったな劉先生」

「・・・先生はやめて・・・」

「――貴子。ガンバレや」

サングラスを掛け直し、満面の笑顔の暴言葉に、ゆっくりと――貴子の今まで無表情に近かったクールな美貌が柔らかく女性的な笑顔になった

「そつえば、あの子見ないわね？ 同伴にしてはもうこんな時間じゃない・・・週末に公休？」

貴子がワイングラスを空けながら店内を軽く見回した

「まっさか。ウチの真面目なNO.1が休む訳ねえだろ。同伴だよ。一番の太客だ。もうそろそろ来るとは思うがな・・・挨拶させるさ。つてかあの子もアンタの大ファンでなあ・・・この間の3部作の「胡蝶蘭」なんざロツカールームでも読んでやがるから、注意したくれえだよ。来店したらサインが欲しいってうるせえし。ま軽く話してやってくれねえか？」

先程までの暴の落ち着いた雰囲気は少々変化している。貴子は微笑を向けた

「ふふ・・・全く貴方あの子には適わないみたいね。あの子が入店する前はずっとNO.1を明け渡さなかった貴方があっさりあの子に譲って、しかも取り戻そうとしないでNO.2に甘んじているのは意外だけどねーまあ大体分かるけど」

困ったような暴の表情。ワインをぐつとあけた。常に余裕の体を崩さない彼の困った表情を見ることが貴子にとつて楽しみの一つであったーこの話題は、完璧な男の心の隙間を覗き込む事が出来る「何度も私の席に連れてきたしー他の客も旨く定着させてあげてたんでしょ？お節介も余り過ぎるとオーナーに怒られるわよ」

クスクスと指をグラスの淵に当てながら貴子は楽しそうに笑う

「まあ・・・いいじゃねえか。いい子なんだよ素直で努力家でさ・・・知ってるだろ？俺がNO.1よりあの子がトップのがこの店にとつてもイイってことはオーナーも了承済みだ」

「不思議ね・・・他のホストなんかーどんな太客にも全く興味の無かった貴方がどうしてあの可愛い子一人にそんなに執着してるのかしら？」

「お前は別だつて、貴子。もう勘弁してくれや」

和やかなテーブルの雰囲気を払うようなボーイ達の歓迎の声が入口付近から聞こえてきた

「Yamatō-nadeshiko」の押しも押されぬトップホストーNO.1^{ヒカル}光が、その一番の太客・ネオ池袋最高の高級会員制クラブ総支配人ーキャンサー・Gと共に同伴出勤して来た

ー

全てを可能にする男（前書き）

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

全てを可能にする男

最高級の社交場という場所はある種トップクラスの人間達の社交界の繋がりを開拓する為にも使われる。ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」は勿論女性客が大半ではあるが、一部男性会員も存在する。しかしそれは決して男色的な意味合いでは決して無い。無論そういう嗜好を持つ男性はこのネオ歌舞伎町を多く訪れる。この「Yamatō-nadeshiko」在籍の、若く美しいトップクラスのホスト達は勿論その対象になるだろうが、このクラブはその種の嗜好・目的の男性客は決して会員にはなれない。それはオーナーの信念でもあり、また女性の扱いを徹底的に覚えさせる為の手法でもあった。男性の相手をする男性というものはある種媚が生まれる。男性同士はジェンダーが対等だからだ。そして――フェミニズムの見地から言えば異論があるであろうが、女性はいくまでも男性に依存させるべきというジェンダーの概念をホスト達に徹底させ、「何でも思い通りになる」男など、どのように外見が美しかろうと何の魅力も無いことを――プライドが高く今までその財力と美貌から「何でも思い通りに」なってきたであろうトップクラスの女性達に理解させ、何とかその男を自分の思い通りにさせたいと考えさせ通い詰めさせる――それこそがこの「Yamatō-nadeshiko」の盛況のカラクリであり、それは売り上げに顕著に現れていた

さて――たった今来店した、華やかな金髪美女多数に囲まれた一際背の高いサングラスを掛けた男性が、陽気な笑顔で予約の札が立った団体席に歩み出した。そしてその傍らには「Yamatō-nadeshiko」のNO.1ホスト――^{ヒカル}光が少々困ったような微笑で歩く。淡い色合いの細い髪が柄の入ったスーツに映えていた。白い肌、蒼い大きな瞳。一見少女の如く優しげな美少年だった。優

しげといつても、NO・3の翔のような端正な美形ではなく、非常に親近感を持たせる美少年だ。

> i 2 2 6 0 — 3 2 2 <

一年前、このクラブに入つてすぐに光はNO・1になった。全くこの世界に関わりの無かつた美少年がこのクラブに入店出来たのは当時のNO・1暴（現在はNO・2）の尽力があつたからだつた。そして光がNO・1になってからは、一種閉鎖的な社交場であつたこのクラブはメジャー路線に転向し、マスコミ宣伝にも多く乗り出した。当時ホストクラブ業界は安価な店が乱立し、金銭的・女性客の若年化・ホスト達の素人化（友人のような気安さ）などが主な原因でトラブルが非常に多く、それに歯止めを掛けるべく新しく施行された法律により下火になりかけていた——だからこそオーナーは徹底したプロ意識を醸し出す暴ではなく非常に親近感・安心感を持たせる美少年の光を前面に出し、路線変更を——それは確実に成功していた。勿論それはホストのプロ意識の低下や友人感覚などというものではなく、値段も質も決して低下させない。光は安心感と共に非常に育ちのよさや上品さも伴う魅力を持っていたのだつた不思議なもので、光はNO・1になつても決して恨みや妬みを買うことは殆ど無かつた。勿論実質NO・1の暴が後ろ盾についたというのもあるであろうが、光には不思議な魅力があつた。その大きな瞳に見詰められると、自らの奥底までを見透かされているように、素直になつてしまふ。心底に隠蔽している感情などバカらしくなる程に。そして非常に彼を守りたくなる。美しく、ある意味この世界に汚されていない光の素直な真白な精神。それこそが人間と人間との陰惨な化かし合いに身を置くトップクラス・セレブレイ達の最後に残つた微かな心に——温かい灯火を灯した。その仄かな温かさが消えないよう、いつまでも照らし続けて欲しいと、客や殆どの従業員達も——光を守ろうとした

「おう皆！ステージでダンスを披露しな！今日は「Poke-danz」の開店祝いにこの「Yamato-nadeshiko」のNO.1光ちゃんがお祝いに来てくれちゃったんだからなあ！盛り上がったぜー！さあてそのお礼だ！勿論オーナーOK貰っちゃってるさ！そら景気良くイケやー！」

サングラスの男はファの付いた高級スーツに身を固め、周囲の華やかな金髪美女達に向かって陽気に手を上げる。するとその女性達何人かがステージに上がり、見事なダンスを繰り広げる。その女性達は容姿や肌が美しいことは言うに及ばず、その衣装が何とも華やかであった。一人一人可愛い動物の耳のような、触覚のような。それは世界的に有名なロングランを続ける舞台衣装の一部で、「Poke-danz」はその舞台の名だった。その衣装デザインをこの陽気な男は全て引き受け、海外で由緒あるデザイン賞も受賞した程。その衣装や名を使い、本日ネオ池袋の一等地に高級会員制クラブ「Poke-danz」をオープンさせたのだった。このホストクラブのオーナーとも深い繋がりのある彼への祝いとしてオーナーはNO.1光を名代として行かせた。勿論店が終了した後はこのクラブに同伴来店は常識だ。しかも彼は自らだけでなく一流ホステス20名も一緒に同伴。何とも常識はずれ且つド派手で陽気な登場に店中の視線が集まる。席についた光は隣の男を申し訳無さそうに見上げた

「あ、あの・・・豪さん・・・私少しかだけ他のお客様にご挨拶に行ってもいいですか？」

「Poke-danz」総支配人キャンサー・ギー本名かどうかは定かでは無いが通り名は豪^{ゴウ}。ネオ池袋に20軒以上のクラブを持ち、本人も世界的に有名なデザイナーであるネオ池袋の顔役。キャンサー・Gという通称はcan・sir・go。全てを可能にする男・豪（G）という尊敬と畏怖を込めたものだった。そして常に大きなブランド・サングラスを掛け素顔を見た者はいないが、その

偉丈夫な体格は2メートル近くはあるであろう、そして大らかで陽気な――どのような女性でも惹かれるであろうタイプであった。総支配人という肩書きであるが、トップホストとしても充分やっていけそうな男性的魅力に溢れた男

> i 2 2 6 1 — 3 2 2 <

「いいーよ！光ちゃんは忙しいもんね！ウチの店で一杯サービスしてくれたしね。もー「Yamatō-nadeshiko」のNO.1が来てくれるなんて最高の開店祝いだったよ！光ちゃんが来てくれただけで店内ぱあって華やかになっちゃったー！でもウチの女の子達にもみくちゃんにされちゃってごめんごめん！少し休んでおいで！でもねえ・・・早く戻って来てよ！シヤンパンタワー積み終わるまでに戻って来てくんなかったら豪ちゃん泣いちゃうよー！」あつはははと陽気に笑う豪はぽんぽんと光の頭を優しく撫で「いいでー」と促したが

「光ちゃんドコ行く？ずっとグレイシイの傍に居てくれなきゃだよー」

「わっ・・・グ、グレイシイさん・・・？」

光の隣で酒を作っていた美女が一人、少々拙い言葉と光の立ち上がりかけた肩を押さえ小さな頭を豊満な胸に抱き込んだ

「可愛い光ちゃんディスクだよー」

淡く白っぽいブルーの長い髪を垂らした英国メイド衣装の東欧系美女。光は困ったように豪を見た

「こらこらグレイシイ？こんなすっごいクラブのNO.1光ちゃんはお忙しいんだ。困らせちゃったらカワイソだろ？離しな」

豪がグレイシイの長い髪を一房摘み、それに甘く口付けながら笑う「ヤダー！ボスもずっと居て欲しいクセに――！」

首を振り――豪を見上げたグレイシイの瞳が見開かれた

「・・・Do not you obey my instruction？」

豪の深く黒いサングラスから――危険な光が彼女に伝わる

「It is even how much as taking the place etc. Will I right now load it into the freighter to the mother country?」

まるで電流を流されたかのように、弾けるようにグレイシイは光から手を離し――俯いた

「・・・I am sorry the boss・・・」

「グレイシイさん?どうかしたんですか?」

ガタガタと震え、瞳に涙を浮かべている俯くグレイシイを光はそつと覗き込む。彼に今の言語は理解出来なかったようだった

「イイんだよ光ちゃん!グレイシイはおいたがすぎたから少しおしおきしただけ!さあ行っておいで!」

危険な光は消え去り――豪は常の陽気な声に戻って光の肩にぽんとその骨ばった大きな手を置く

「あ、その前にこれ――」Poke-danz」では中々渡せなかったから・・・」

光は足元に置いてある紙袋から小さな包みを出した

「んー?なにかなコレ?」

豪はにこにこと小さな掌にのったラッピングされた包みを見る

「チョコレートです。小さいカップケーキだけど・・・私開店のお祝いに作っただけです!皆さんカロリー計算とか大変そうだからお砂糖控えめです。本当はもつと高価な物お贈りしたかったんですけど、私余り――一番得意なお料理でお祝い出来たらなっと思って・・・493個は作れませんでしたけど・・・はい!グレイシイさんもうぞー!」

俯くグレイシイに包みを持たせ――につこりと笑顔を送る。その、素直で何者をも赦す太陽のような笑顔

「あんがとね。光ちゃん・・・ほらほらグレイシイもいつまでもそんな辛気臭い顔してないで、笑いな!光ちゃんに笑顔見せて安心させてやんな!」

光の笑顔につられてーグレイシイが自然と笑顔になりチョコレート・ケーキを一口で飲み込み美味しいと笑う

「豪さん甘いもの苦手って伺ってたので・・・ビターで作りましたけど・・・食べて頂けますか？」

そう包みを差し出しながら自分を見上げる光の言葉を聞いた豪ーサンガラスの中の瞳が変化した

「光ちゃんが俺の為に作ってくれたのか・・・でもさどうして？どうしてこんな手間かかることしてくれたの？大変だったよね」

NO.1ならばブランドケーキを手配してそれを届けさせればいいだけだ。光は、はにかんだように笑った

「え・・・だってー少しでも美味しいと思って頂ければ・・・私のことその時だけでも忘れないでいて下さると思ってー豪さんには本当にお世話になってますから・・・」

何とも素直な、場合によってはわざとらしい程の言葉ーしかし光の場合は全くそのような作為的雰囲気は皆無だった。何故かは分からない。それは彼自身が持つ天性のものなのかもしれない

「ーね、光ちゃんさあ・・・もう一回言ってくれっかな？」

豪は差し出された包みをその大きな武骨な掌に乗せてじつと見詰めていたー常の笑顔は消え失せている

「え・・・？な、何か私お気に障る事でもー？」

「いやいや全然違うよ・・・今の、さー食べてくれる？って・・・その時だけでも忘れないでいてくれる？ってーさ・・・」

不意に雰囲気に変化した豪ー常に陽気で明るい男性の雰囲気は正反対のように陰気に変化していた。光は困惑しながらもその言われた通りの言葉を繰り返した

「ーやっぱ・・・似てんな・・・」

ボスの変化した雰囲気、敏感に反応した美女達は少々の距離を空ける。豪は膝を開け手を組みー俯く

「こういう場所でききなし重い身の上話する客ってウゼーよな・・・ま、いいかー聞いてくれっかな光ちゃん？ー聞いてくれる

だけでいい・・・」

俯いた豪の顔を覗き込み、光は何度も頷いた

「俺にはねーお袋違うけど妹いたの。俺が中坊ん時で妹は5歳いきなり家に来てさ俺のことお兄ちゃんって呼ぶんだよ・・・驚いたね。俺の親父はろくでもねえクズで、クスリでイカれてる時は俺だけじゃねえ・・・妹まで殴ろうとした。俺はブチ切れてー妹はそういう施設に預けられたよ。そののが安全だもんな・・・でも俺は出来る限り逢いに行った。いつもすげえ喜んでくれて「お兄ちゃんお兄ちゃん」って言うて縋りついて来るんだよー温かった。素直で本当に可愛くていい子だった。たった一つの守りたいものだったんだぜー」

確かにこのような社交場は様々な人生模様が覗ける。光もその手合いの客の扱いはそれなりに慣れている。しかし豪ー陽気で男性的、且つ財力も名声も手に入れた完璧な男の、このような弱弱しい姿は初めて見たのだー口を挟むべきではない、と一流の接客業の人間ならばそれは熟知している。心の奥底に自ら閉じ込めた心情をートラウマを吐露させる手法は精神医学のケア治療と同等のものだ

「ーバレンタインにさ・・・あの子俺にチョコ作ってたって渡すんだ。でもな笑っちゃった。たぶんTVとかで見たのかもしんねえけどく湯せん>って意味が理解出来なかったんだろな。鍋に湯沸かしてそこに板チョコ放り込んで・・・中々固まらないから製氷器にツツコんで無理矢理冷凍室で固めたってーはは、ただの茶色い角氷だった」

何となく光にも理解出来たのだろう。豪はその妹と自分の今の行為を重ねているのだ。華やかな音楽が流れている筈の店であるのに豪の言葉一つ一つがはつきりと光の耳に届き続ける

「お兄ちゃん、食べてくれる？ってー見上げてきた」

豪は両手で自らの顔を覆ったーサングラスの上から

「お兄ちゃんと離れてても、これ食べてる間は私の事思い出してく

れる？忘れないでいてくれる？」

光は「――自分のした行為がどれだけ豪の心の傷を曝け出させたのか理解する」

「――生きてりや――お前と同じ位の年齢だ……」

「――？施設で離れ離れになったと想像していた光はその豪の言葉に驚く」

「……殺された……近所うるついていた妙な学生に拉致られて――可愛かったから連れてって騒いだから首絞めたんだとよ……あの子下着を脱がされてた。俺がホワイトデーに贈ったシャツだけ着て――滅茶苦茶にブチ殺してやるつもりだったが、そいつはすぐ捕まって精神鑑定で無罪。頭イカれてたんだとよ……親父と同じ――そして俺は無力なただのガキ」

豪はふつと顔を上げ、チヨコレートの包みをゆっくりと開ける。光の不安げな視線にやつと気付いたのだろう

「そんな時誓ったんだ……死んだ妹に――俺は強くなってやる。」

全てを可能に出来る力を手に入れてやる――て……な……
「――だから俺の名前は can sir・G！我ながらカッコいい名前つけたでしょ！ね？光ちゃん！」

後半の言葉の響きは常時の豪だった。明るく陽気な――だが違う、と光は直感する。無理している、自分に心配を掛けないよう、そのナイーブで限りなく優しい精神をサングラスで隠している彼の本性を見通す。光の一番の長所はその人間の本質を確実に見通す力。しかも無意識に――それこそが夜の世界を生き抜くプロにとって徹底的な魅力

「人は二度、死ぬそうです」

厚いサングラスをも貫く蒼い視線が豪を見詰める

「一度目はその寿命で体や魂が死んで――二度目は本当に誰からも忘れ去られてしまった時」

静かな言葉――豪の偽りの笑顔は消え失せて行く

「誰の心の中にも完全にいなくなってしまった時――」

にこり、と光は笑顔になり

「妹さんは豪さんが覚えてる。ずっとずっと大切に綺麗に心の中に仕舞っている。だから生きてます」

「……か……わ……わ……い……い……」

「わ……っ？！豪さんっ！？」

いきなり豪は光をぎゅうと抱き締め、幼子を高い高いするように抱き上げた。周囲の美女達もあつけにとられるほどだった。――照れ隠しの、豪の豪快な行動

「も……う！可愛すぎ！豪ちゃん持って帰っちゃうよ？一緒にポテトいかがさ……」

「あ……あの……今のはその……劉丁一先生の「胡蝶蘭」に載ってた言葉で……今度お貸ししま……」

「お久しぶりです。キャンサー・G」

すると――抱きかかえられ慌て捲る光の両腋にす、と手が入り――ひよいとその身が床に降ろされた――NO・2、暴だった

全てを可能にする男（後書き）

「人は二度・」のセリフは、西原理恵子先生の作品内にあるお言葉
葉を参考にしました

心の中に（前書き）

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

心の中に

「華火、ちよつと悪イ・・・待つてくれつか？」

華やかな美女達のステージ上のダンスに一層の賑わいを見せる、ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」は最高潮の盛り上がりだった。このクラブは客の好みに合わせてステージを楽しめるテーブル、そして静かな時を好む遮音性のあるルーム、商談などに使うバー・カウンターなど様々なテーブル・ルームを広大なホールに用意してある。ステージを楽しめるテーブルに座る黒男は、劇団四屋トップ女優華火の長い黒髪に口付けながらそう語りかけ、二人の気の利いた彼の派閥であるヘルプをインカムで呼んだ

「うんいいけど・・・あのオトコってアレでしょ？確か有名なデザイナーで・・・良くTVに出てる池袋のクラブオーナーだったつけ？」

華火は黒男の表情を覗き込み名残惜しそうに手を添えるが、大きな手に頬を包まれその手を離れた

「ああーウチのオーナーのダチだしな・・・ちよつとアイサツしてすぐ戻るかな？」

「・・・でもステージの女達やっぱり迫力あるわね・・・何か気後れしちゃう・・・」

華火は不安になっているのだ。それは現在与えられた役の仕事もあるだろうが、やはり指名しているホストが他のテーブルに行くことはプライドの高さから口には出さないが嫌なのだ。彼女は未だ若いステージ上の成熟したホステス・ダンサーに嫉妬していたー

「何言つてんだバカ。じゃあお前がすっぴんで汗に塗れた稽古着姿を見せてやれよ。演技に打ち込むお前が一番キレーだぜ・・・？本気で teme の信念を貫き通そうとする女が一番キレーだ。あんなのはタダの金の為じゃねえか・・・どんなにみてくれを飾ろうとその内面からの真剣な美しさにやぜってー適うモンじゃねえってコト位、お前程のイイ女はもう分かつてるだろ？な・・・」

その低い言葉と覗き込んで来る紅い瞳――華火は頬を染め「なるべく早く戻ってよ」と呟き黒男を送り出し、ヘルプの差し出す酒をあおった

「弥子ちゃんごめんね。オーナーのお友達のエライ人来ちゃったからさちよつと僕ご挨拶してくるね。すぐ戻るから――あ、すみませんシャオチェン小千さんちよつと来て頂けますか・・・」

ステージからは遠いがある程度の賑わいを見せるテーブルに座る翔は、弥子にそう告げ、インカムに唇をつけた瞬間

「控えております」

暴や黒男とも全く違う、限り無く落ち着いた低い声が翔の背後に静かに掛けられた

「うわ、いつの間にいらしてたんですか小千さん？」

小千――シャオチェンと呼ばれた男性は、年の頃は40代前半程。細い眼鏡を掛け、中肉中背の落ち着いた紳士――という風情。翔のような女性的に整った美貌も無く、また黒男のような男性的雰囲気も無い。しかしその雰囲気は強いて上げれば超一流仏料理店のボーイ長といった所であろうか、非常に洗練された物腰と雰囲気を持っていた

「豪様がご来店されたので、弥子様のお相手を命じられると思い控えておりました」

遙か年下である翔にも、慇懃な程の丁寧な口調。彼はこのホストクラブ設立時から古株であり、在籍中10位以内を一度として陥落したことは無かった。シャオチェンという源氏名はオーナーの名前に非常に近い事から、オーナーの親戚筋という噂ではあるが実際の所は誰も知らなかった。クラブ従業員は全て彼に敬語と礼儀を尽くす。例え彼のナンバーが幾つであろうとも、常に控えめでクラブ内の揉め事を全てその洗練された物腰と明晰な頭脳で穏やかに収める彼に誰もが感謝と尊敬の念を抱いていたからだった

「弥子様、こんばんは。お逢いする度にお美しく、清楚なお可愛ら

しさを益々抱かれておりますね」

「小千さんこんばんは。この間お貸しして頂いた御本、とっても勉強になりました。でも少し分からない所があつて・・・お聞きしても宜しいですか？」

「英文原文のままでしたが、弥子様ならばきつとご理解頂けると確信しております・・・どうぞ何でもお聞き下さい」

弥子は小千の甘い挨拶に気後れすることなく――寧ろ楽しむように答えた。翔以外には決して心を開かない弥子が小千にだけは楽しそうに自然な笑顔を作る。実際父親に近い年齢でもあるし、その穏やかで洗練された雰囲気は年若いホストには中々醸し出せるものではないだろう。翔はヘルプを頼む時は必ず彼を呼び、勿論弥子も何度と彼と話している。安心したように翔は席を立った

「じゃ少しだけ小千さん弥子ちゃんをお願いしますね。弥子ちゃん、君が楽しそうなのは僕嬉しいけど、あんまり楽しそうにしていると僕ジェラッちゃってまた可愛く怒っちゃうかもだよ？じゃ・・・」
弥子の顎に指を掛け、頬に軽くキスをする、真っ赤になった弥子を小千に預けて翔はキャンサー・Gのテーブルに歩んで行った

「あつれ？暴さんじゃなか！ひっさしぶりだねー元気だった？随分ウチの店来てくれないじゃんー女の子達淋しがつてるからたまにはおいで」

降ろさせた光を座らせ、暴は豪と光の間に座り豪に酒を作った

「弟、行かせてますよ」

「そーそ、黒男君さーよく来てくれるのは嬉しいんだけど、もうウチの女の子食べまくりでさ！あつとごめんごめん光ちゃんの前でしたー」

手を口にあてて、ごめんごめんと笑う豪に光は目をぱちぱちさせていた――光はこの豪という男性客が好きだった。それは決して男

色的な意味合いではなく、勿論豪もそうだ。太客であつても彼は一種オーナーの友人であり、ストレスの溜まったホステス達がホストクラブへ行き金を落とし、またホスト達もストレスをホステスに発散し金を落とす――夜の世界の華やかなカラクリ。このクラブのNO・1の箔付けの意味もある太客。ストレスの溜まった社交達を引き連れ金を落とす――その指名は勿論NO・1。しかしそんな名目上の意味だけでなく、豪は常に明るく優しかった。ネオ池袋の顔役として、この業界全体の発展を願っている彼にとって光は最適な宝だ

「光ちゃんいいよ、暴さんとご挨拶に回っておいで。暴さん少し休ませてやってね、よろしくー」

暴の差し出した酒をちびりと飲むと、豪は光に向かって手をひらひらとさせた――もう先程までの弱弱い彼は微塵も存在していなかった

「さっきのトークは嘘だよ。気にしないでいいから今夜は楽しもうね！」

暴に促される光にそう明るく言つて――豪はチョコレート・ケーキを一口に入れ

「このチョコの味、俺ずーっと覚えてるからね」

そう、何度か振り返る光に――心の中の妹に語りかけた

沈滞と刺激（前書き）

この創作は実際の土地や人物の名称とは全く関係がありません

沈滞と刺激

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」一番の華やき
を見せる団体席——キャンサー・Gのテーブル

「豪さんお久しぶりです。「Poke-danz」の開店おめでと
うございました。お祝いに伺いたかったんですが・・・」

「あー！翔君？うつわ相変わらず美形だねー！さんざ女の子泣かし
てるんでしょ！君はそのキレーな顔と正反対の酷いオトコだからね
ー！」

グレイシイら美女を侍らせ、その肩や胸に腕を絡ませながら、キャ
ンサー・G「豪はテーブルに声を掛けてきた翔に陽気に答えた

「それは酷いですよ。僕は女性を騙したことなんて一度もありませんよ」

苦笑しながら翔は美女達の間に座る。周囲の美女達は絵のように端正な美形ホストに色めき立つ

「はっはは・・・女から望ませるようにしちゃってんでしょ？おう
皆！この美形は酷いオトコだぜ？一旦目つけられたら——にされちゃうからな！気をつけるよー！」

美女達は一斉に笑い、翔も笑う。——ってなんですか？と

「まあまあナイシヨにしないとあげよつかなー。あ、ところで君
ジヨニー社長に事務所入れて言われたんだってねえ！あの社長も
スキモノだから気をつけなよー！」

チヨコレート・ケーキを意外な程の器用な手つきで包み直しながら、
豪は翔に話題を振る

「ああ、あれですか？お断りしましたよー。僕人前で歌ったり踊ったりなんてアガリ症ですから無理ですし」

「モツタイないヨー！ジヨニー北河社長に売り出されタラ芸能人だよー！アイドルだよー」

イエローの耳の衣装を着けた美女が、翔に酒を勧めながら腕を絡ませてくる

「いえいえ・・・僕なんかに勿体無い程のお申し出でしたけど、オーナー判断にお任せしまして丁重にお断りして頂きましたよ」

「いいじゃねえか、小娘相手のアイドルになっちまえよ美形くん」
背後から低い声が翔の耳に届く。黒男だった

「キャンサー・G。いつもお世話になってます。本日はご来店おめでとございます」

「出たな？この大食漢が。ウチの女共殆ど食べちゃってどんだけフードファイターなの君はー！」

豪は黒男をからかうように声を掛け、席を作るように美女達に手を振る

「勘弁して下さいよ。俺はそーいう男じゃないツスよ」

「あのねえ黒男・・・もう少し言葉遣い改めなよ。女性客にはそれで売ってるかもしれないけど、豪さんに失礼だと思わないの？」

対面に座る翔が鋭い視線を向けてきてそう注意を促す。先程の軽口に対する反撃なのか。黒男は鼻で笑う

「まあまあ、相変わらず仲悪いね君等。楽しく行こうぜ！ホラホラ皆じゃんじゃんボトル空けるや！」

クツクツと笑いを堪えられないように火花を散らす二人のホストを嗜めると、ピンクドンペリのボトルを掴みそれをそのまま飲み干した。その豪快な呑みっぷりに美女等が歓声を上げ、二人も酒を一気に飲み干した。場は益々華やかになって行く

「あーねえ・・・君等もなんつーかさあ、決まった子作んなよ。手当たり次第に食いまくってないでさ。ホストだからまあ難しいだろうけど、それ一人いるだけでまた変わってくるもんだぜ？体の中心に一本ぶつとい線が入るつつうかなー。それでまたオトコっ振りも上がるってモンだぜー」

豪は空いたボトルを放り、新しいワインを空けながら二人に話しかける

「耳痛いですー・・・中々そういう子いないんですよー」

翔がちょっかいを出してくる美女の頬にキスをしながらそう応える
「その言い方ってことは・・・豪さんには居るんスか？結婚したっ
つー噂は聞かないッスけど？」

膝の上に二人の美女を乗せて黒男はからかい半分にそう質問する

「結婚？そんなの俺がするわけないでしょ！・・・あゝでも俺には
いるよ！もう可愛くて可愛くて堪んねエね！その子に嫌われたら豪
ちゃん生きて行けないかもしれない！ちよつと不安そうな表情され
ただけですげえビクビクしてんもん俺！その代わり笑ってくれなん
かしたらもう幸せで幸せでもつと堪んねえなー！」

「ボス！そんな子いつの間二？！お店の子？酷いヨー！ 그레이シ
達はみーんなボスのことアイシテルのにー！」

그레이シイが豪の腕を絡めながら笑い問い詰める。豪はハハハと笑
いながらワインをまた一氣に煽った

「何でも思い通りになる女だけじゃなくてよ・・・どうしたら笑っ
てくれんのかー！それだけを考える相手、見つけるやガキ共」

ふと低い声になる豪の雰囲気はー！翔と黒男は一種違和感を感じた

「ー！ご歓談中失礼致しますキャンサー・G様。伊勢教授が御来
店されました。バー・カウンターでお待ちでございます」

ボーイが話のタイミングを見計らって、ソファの背後から身を屈め
言葉を掛けた

「・・・あ！やつと来てくれたの？！ネオ成田から直行だってお約
束だったんだ。結構早かったなあ・・・」

絡みつく美女の腕を優しく外し、豪は立ち上がった。彼の来店は勿
論NO・1との同伴でもあったが、もう一つの目的もあった。それ
はバー・カウンターで待つ人物とのアポイントメント

「じゃ、豪ちゃんちよつと行ってきまーす。君等は好きにしてい
よ。ここで女達と好きなモン頼んで自分のポイントにしてもいいし、
自分の席戻ってもいいしー！その代わりって言っちゃあ何だけど、
俺の指名の光ちゃん苛めたら許さねえよ！」

あはは、と陽気に店奥に設置されているバー・カウンターに歩いていく豪の後姿を見ながら、翔と黒男は顔を見合わせた

「なんつーか・・・ほんつと豪快なヒトだよな・・・伊勢教授とあのヒトが何の話があんだア？全く正反对じゃねえか・・・」

黒男は美女が突き出してきたメロンやらチーズやらを口に放り込みながら怪訝な表情だ

「何か意外だよな。あのヒトにそんな執着する女性なんているのかなあ？・・・って僕らお説教喰らったみたいだね。そんなコト言われてもこの状況じゃあねえ・・・」

美女達のキス攻めに少々の苦笑を漏らしながら翔は溜息をついた

「・・・そーいや・・・オーナー、事務所にいねえのか？もうこんな時間だぜ？いつもならとつくに店中歩き回って客等に挨拶してんのかな？どうしたんだかな・・・」

クラブ内の喧騒に二人の会話は飲み込まれる・・・これからだ。これからこの華やかな社交場は最高の盛り上がりを見せ始める。それがこれから始まる・・・

「お待たせして申し訳ありませんね、教授」

店の最奥・・・カウンター内に初老のバーテンダー。カウンターに座っているのは男が一人・・・喧騒を続けるホールとは正反对の、テイク・ファイブが低く流れる静寂の別世界だった

「4分26秒の遅刻をしたのは私の方です。申し訳ありません」

カウンターに座っているスーツの男・・・教授と呼ばれるには余りにも若い。30をいっているのかも曖昧な程の美青年だった。ツイポイント（縁無し）の眼鏡を掛け、額を出した女性のような細い栗色の髪と非常に知的な容姿・・・ネオ東京大学名誉教授・伊勢政治イセ・マサルだった

「そんなの遅刻に入りませんって。海外の学会から帰国したばかりを無理にお呼び立てしたのはこちらの方なんですから、幾らでもお

待ちしますや」

豪は伊勢の隣に座ると、バーテンダーに飲み物の注文をした

「教授は？何も呑んでらっしゃらないじゃないですか。何呑みます？それとも何か軽く食いますか？結構旨いですよ」

このクラブはかなりしつかりとした食事も可能だ。厨房にはダルジヤンやマキシムなど一流料理店から引き抜いてきた正規の免許を持つシェフも数十人は控えている。ネオ銀座の小さなクラブなどのようにボーイが手近な料理屋からラップで覆った料理を運ぶなど有り得ない

「結構です。私は明日大学での講義がありますからその論文もまとめたいし、アルコールを入れる訳には参りません」

伊勢はそう何の感情も窺い知れない様な口調で軽く手を上げる。豪は軽く笑ってバーテンダーに視線を送ると、彼は心得ているのかノンアルコールの飲み物を手早く作り、伊勢の前に置く。豪にはギムレットを無言で差し出した

「トムズ・バーでも良かったんですが、今日俺アちょっとこのクラブに来なきゃいけない大切な用事がありましたね・・・じゃ、さつさと話終わらせてご研究の世界にお帰しなきゃいけませんや」

「そうして下さい。私はこのような場合は余り好みません」

伊勢はこの国最高学府の名誉教授という肩書きを持つ知識階級であり、ある意味その世界以外を知らない、生き方そのものが研究者であつた。その身に溢れる知的な雰囲気は――例えば貴子のような都会的に洗練されたものとは少々違い、全く知識を探索することに全てを掛けるアカデミックな知的さだ。確かに彼にはホストクラブのような世俗に塗れた社交場は相応しくないだろう

「だが、このクラブに出入りするようになったからこそ、アンタはそのお得意の経済論に現実性が増し、最高の論文を書き上げスゲエ賞を掴み取り――そのトシで名誉教授なんつー肩書きを手に入れたんだろが？教授？」

豪は伊勢の端正な顔を覗き込むように笑った。伊勢は少々乱暴な言

葉にも全く無表情を崩さず飲み物を一口飲んだ

「――経済学はどうしても机上の論理になりがちです。いやそれこそが理想論を掲げる本質なのかもしれませんが――確かに私はこのクラブで貴方や夜の世界に身を置くプロの方々と親交を深め、それをある意味研究の因数とした。理想論では無い……本当に現実……リアルイズム徹した研究こそが私のライフワーク――いや、それは厳密には経済学とは言えないのかもしれない……それは最早――」

アカデミックな人間は一種独特の雰囲気がある。何とも難解に自身に自問自答を常に続ける研究世界に入り込んでいる。豪は一つ溜息を付くが気にせず話を続けた

「……で、来期の国会で法律がまた強化されるっつーのはマジでしよつかね？」

「――え……ああ、そうです。政党公約の一つとしても、マスコミ等でさんざん取り上げられている飲食業（ホストクラブやキャバクラなどは正確には飲食業に入ります。風俗営業法は性的サービスを金銭の代価を通して営業する店に適応されます。かなり細かく分類されてます）に対しての締め付けは益々強くなります――全く……経済というものは人と人が競争するからこそ発展し理想に近づいていくものだというのに……この国の夜の世界のサービスは他国から見れば類を見ない程多様化し非常にレベルが高い。それがマクロな意味で経済全体の牽引の下敷きになるという事が全く分かっていない！だからこそ私は貴方のような真のプロとお付き合いたい――」

熱い演説的な口調になってきた伊勢を豪は見ると、まあ――悪い男では無いのだ。この国の動向を、未来を真剣に考えその専門的立場から全体を見通しそれに発奮する。非常に真面目で、彼の本質は熱い男なのだ。その冷静で知的な雰囲気とは正反対に。彼の論文は勿論豪は目を通して。彼のようなアカデックな人間と話すにはこちらにも相応の知識が必要だ。一度自分達の世界に分不相応と判断

されれば、このようなアカデミックな世界に身を置く人間は決して心を開かない。本音は言わない。冷たく何の感情も無く下界のイキモノと判断されてオワリーー彼の論文はクールで整然とした文章であったが、その内容は非常にこの国全体の事を考え、その打開策を見つけようとしていることが分かる、熱いものだった

「・・・どうも。さて俺らはどうすりゃいいんですかね？その助言をお聞きしようと、お忙しい中お呼び立てしたんですよ・・・」

熱い演説を振っていた伊勢がびたり、と止まりー不思議そうに豪を見た

「・・・え・・・ああ、貴方は完璧ですよ？ネオ池袋に大規模店をオープンさせたと伺ってます。何とも競争原理に徹した素晴らしい店です。この国を代表する繁華街の一つ、ネオ池袋は暫く問題ありませんー問題はこの「Yamatolandshiko」です」
何を言っているんだ？というような表情で豪を見た後、片手を額にあて溜息をつく伊勢を豪も不思議そうに見た

「・・・どういう意味ですかね？この店は路線変更しても、完璧な盛況振りじゃないですか・・・寧ろ以前よりーー」

確かに一年前、NO.1は入れ替わった。しかしそれは決して間違った方向ではない。時代に合わせた柔軟な経営方針の転換は、経済学見地からいっても何の問題も無い筈だ。寧ろ正しいことだーー結果は見ての通り。クラブは連日の満員御礼。周囲の店もそれに牽引されて華やかに、益々の発展。トラブル等もリーダー格の店が目を見せ秩序は回復しーー

「・・・Stability gives birth to stagnation, and stagnation accelerates the decline・・・」

伊勢はそうー小さく呟いた。一瞬の言葉を聞き取れず、豪は耳をそばだてた

「この店は余りにも安定し過ぎている。貴方が指名しているあのNO.1の少女のようなホストー彼は危険だ。余りにも穏やか過

ぎる。彼の存在は以前のこの店の全てを根本的に変化させてしまった。彼の刺激が必要だ。この状況を打破する強烈な刺激が。それを行わない限りこの店に未来は無い、ネオ新宿の夜の業界。強い。強いてはこの国全体の経済動向にも暗雲が立ち込めるでしょう。

「そう自問自答するように呟き。伊勢は懐中時計を取り出した

「貴方との約束の時間は終了しましたので、私は研究の世界に還らせて頂きます。それでは、また」

伊勢はカウンターの上に何枚かの札を置き、そう退出の挨拶をして席を立ち、バーの側面にある出口から颯爽と出て行ってしまった。

「・・・Stability gives birth to stagnation・・・」

初めからそこにいなかったかのように、伊勢が出て行ってしまったカウンター。バーで豪は呟く。微かなジョージア・オン・マイ・マインドの音色と、バーテンダーのグラスを拭く乾いた音

「・・・安定は停滞を生み、停滞は衰退を加速する。だと？」

その時、ホールに一層大きな歓声が上がった。ホストクラブ「Yamoto-nadeshiko」のオーナーがステージに現れたのだった

女傑

豪が伊勢とバー・カウンターで話している同時刻――

「――大丈夫か？」

関係者専用のレストルームから出てきた光に暴は声を掛けた

「うん、大丈夫――今日はもう楽だから・・・」

手を拭きながら光はにつこりと笑う。ホールからは華やかな喧騒が響いてくるが、この場所は二人だけの静かな時間だった

「あの客疲れるだろ・・・適当に帰してアフターは断んな。今日はシャワー浴びてすぐ寝ろ、とつくにお前はNO.1のノルマ以上のモン稼いでんだからよ――無理はすんな・・・」

「――ん・・・別に大丈夫だってば。豪さんは凄く優しいし、すぐく私に気を遣って下さるんだ。無理なんて全然させられないよ。Poke-danz」でも女の人達にもみくちやにされそうになったけど、豪さんずつと庇ってくれてた・・・でも、そうだね。今日はアフターはお断りするよ。少し疲れちゃった・・・」

ぽん、と小さな柔らかい髪質の頭に大きな手が置かれる。勤務時間はもう少しだから頑張れ、と

「あの客気をつける。金落とすのは結構だが来店が頻繁過ぎる。旨く距離取れよ。この商売は客掴むことも勿論大事だが、その客をどう操作するかの方が大切なことなんだぜ」

「・・・うん・・・ね、暴は今日アフター・・・ある、よね――勿論・・・」

言いにくそうに俯きながら光は暴に尋ねた

「・・・ん？」

「あ、あのさ・・・ごはん一緒に食べない？・・・私先に帰って何か作って待ってるから一緒に食べよう・・・よ・・・」

光が住むマンションはここから5分程の距離だ。それは勿論NO.

10以内のホスト達限定で用意される高級マンションだった。ネオ新宿一等地に立つマンションの一室を破格の家賃で福利厚生費として給料から引かれる。暴は郊外に家を持っていたが、光が入店してからはそのマンションの一室に住んでいる。同じ階に住む二人は実際何度も互いの部屋を行き来し、食事なども共に摂っていた

「ばっか。アフターはねえよ。これから何か作るなんざお前疲れるだろ、いいさ。何か食って帰ろうぜー」お前のメシはすげえ旨いが、それは今度の公休の時にゆくり食わせてくれな」

くすりと笑って髪をくしゃくしゃにすると、光は顔を上げ嬉しそうに笑った

「――じゃ、行くか。すっげお前の客待ち捲ってるからな。あのド派手男にくっつかれてるお前見せつけられて戦々恐々だぜヘルプ共は――まあお前がにつこり笑ってやりやあ途端に目尻下がるだろーが」

「え？暴は席に戻らないの？」

光の肩を抱きホールに戻ろうとする暴に疑問の声を掛ける

「暫くいいーあ、貴子来てるぜ」

「え！？ホント？お邪魔してもいい？サイン欲しくて……」胡蝶蘭「の感想も申し上げたいんだ！すっごくよかったよあのお話！泣いちゃったもん……」

分かった分かったと笑い二人はホールに戻っていった

「やつと来たか美少年！おらおら散れ散れハゲ共！このアタシを濡れさせるのはこの美少年だけだ！よしココ座れや光！」

ステージを真正面に見ることの出来るテーブルに座る女性客は、暴に伴われて光が姿を見せると今まで侍っていた二三人のヘルプを踵の非常に高いブーツで蹴り飛ばすように立たせ、来い来いと手招きした

「すみませんね斎社長イッキ――「デビル・ズ・エンペラー」が終わっ

たばかりで、ご来店頂いたのに中々顔出させられなくて」

暴は光を女性客の隣に座らせ、自らも女性客の隣に腰を降ろした。

ボーイに酒類の追加の指示を出す

「ん？NO・2！アタもアタシの席に着くのか！このクラブのトップ二人をアタシが独占してるって状況たまんねーな！濡れるぜ！」

「社長さん今晚は。ごめんなさい遅くなっちゃって・・・」

光が挨拶と謝罪の言葉を向けにつこりと笑うと――怒気を現していたその女性の表情は途端に緩んだ

「いい！その表情いいぞ美少年！ざーとらしい男の媚が無い！ベタついた女の媚も無い！完璧なニンフェットだ！全く濡れさせてくれるなあお前は！可愛いぞ！」

ハハハ、と先程までの怒気は何処へやら――^{イッキ}斎社長。耳の下で切

り揃えシャギーを入れた白い金髪、ハード・ミュージックを好む者たち特有の黒を基調とした皮生地で構成されたレア・ジャケット。

金の装飾品――カラーコンタクトを入れたキツイ眼差しが印象的な、非常に迫力のある美女だった。ジョニーズ事務所と並ぶ音楽業界最大手の事務所ダイ・レコーズの社長――斎の事務所に所属するヘヴィ・メタル・バンド「H・M・C（Heavy metal city）」は、ここ数日ネオ富士で行われていた最大の音楽イベント「デビル・ズ・エンペラー」で大成功を収め、つい先程までネオ六本木の「Saturn in saturn」で盛大な打ち上げを行っていたのだった。しかしこの剛毅な女社長は他メンバーが潰れている中呑み足りないと突然店を訪れたのだった

「いやーブツ潰れてるバカ共一応トランクに突っ込んで連れてきたんだが、よく考えりやあいつらがこんな高級店に入れるわけねえよな――一発で入店拒否だ！あつはアタシのような上品なご婦人以外は入れねえもんなあ光！まあ呑め呑め！ハラ減ってないのか？何でも好きなモン頼めよ！」

何とも剛毅で、ある種キャンサー・G（豪）に似た所がある女傑だった。女性ながら殆ど裸一貫で海外に渡り本場の音楽をその華奢な

体に叩き込み——当初は在籍アーティストがたった三人だった事務所を、老舗大手ジョニーズ事務所に匹敵する大会社に育て上げた。最もフェイス・イメージを前面に企画するジョニーズ事務所とは違い、この女社長の経営する事務所の在籍アーティストはその音楽性を顕著に押し出し、歌・楽器・音楽性への執着——それ以外の活動は決してさせなかった。それは他人には決して想像出来ないような苦勞をしてきたであろう彼女の信念だった。たった一つでもいいから自分に自信を持てるものを持って、それだけに特化して何でもいからそこにがむしゃらに突き進め——と彼女は荒い言葉で何度も何度も芽が出ない所属アーティストに叩き込んだ。彼女は決してアーティストを放り出さなかった。自身が本当に諦めるまで何度も何度も怒鳴り、時には殴り——夢を追いつけさせる。本人が本当に諦めるまで。後悔しない程やり尽くすまで——その彼女自身の本来の優しさが——業界全体で非常に恐れられている名物社長だが、決して忌避されず強い影響力を保ち続ける彼女の評価に繋がっているのかもしれない。現実には「デビル・ズ・エンペラー」では好敵手ジョニーズ事務所一押しユニットとの対バンに圧倒的観客の支持を得て勝利したのだった

「ん？どした！アタシみたいな怖いオンナのお相手疲れちゃうか？
ビショーン！」

少々この高級店の雰囲気にはそぐわないかもしれないが、そこはやはり業界最大手の社長だ。本当に場を白けさせるような行動は決して行わない。あくまでもその場のルールに乗っ取って、その場を最大に楽しむのだ——彼女が入店拒否されることなどあり得ないことだった

「———そんなこと、絶対にありません」

この剛毅な女社長は、仕事の付き合いでこのクラブに来店し当初は場の雰囲気合った服装や言葉遣いをしていた。しかし———適当にホストを侍らせて遊んでいた彼女が光が入店した一年前、指名をしてから———今の彼女のような言動や衣服になった

「怖くねーの？美少年？アタシを誰だと思ってんだ？」

斎は光の肩に手を回し、顔を近づけてきた――暴は瞬時に身を乗り出そうとする――酔っているのだ。しかし光はふ、と手を上げてその行動を穏やかに制し斎の目を見上げた

「斎さんはとっても綺麗で優しい女性です。私大好きですよ。怖いなんて一度も思ったコトありません。斎さんのお話とっても楽しいです」

にこりと笑うその笑顔――光自身が持つ、誰にも真似出来得ない天性の、その――

「この間「アレーモ・アレーム」っていう雑誌で斎さんのインタビュー記事読みました。確か<最近のアーティストについて>っていう記事だったと思います。その中で斎さん、<がむしゃらに突き進んだヤツ以外をアタシは認めない>って仰ってました。それって・・・斎さんががむしゃらに突き進んだからこそ、凄く凄くお辛い思いをされたからこそ言えるお言葉なんだって・・・感じました。他の人にそういう思いは絶対にさせたくないから、中途半端に夢を語るなってことだって・・・思いました――私なんかが生意気に言えることじゃないですけど、もしかしたら間違っって解釈してるだけかもしれないけど・・・大好きです、優しい女性・・・一般的な、表面上のものだけじゃなくて――本当の厳しさと優しさを持った女性性は私好きです」

斎の笑顔が消えた――表情は険しいものになる

「・・・そんなコト、アタシ言ったかな――ちっ・・・記者のヤローがツクリやがったんじゃないかねえか・・・な・・・」

光の肩を離し、斎は酒をぐい、と煽る――

「わっ？」

ぐっ、と光の顔が引き寄せられ――

「キスさせる美少年。このアタシに向かって生意気に全く・・・憎たらしい位に――アナタ、可愛いわね・・・」

頬にキスをされ、慌て捲る光に斎は微笑んだ――非常に優しい、

穏やかな微笑

「アナタは男でも女でもないわね。ジョニーのクソジジイがスカウトしたって聞いたから、ウチの事務所にもスカウトしようと思っただけと止めたわ。アナタは此処にいなさい。その信じられないほど綺麗で・・・あり得ないほどの素直さを此処で守り続けて・・・ずっとそのままでいなさいね・・・」

光自身が持ち得る、他の誰にも持ち続けることが不可能な、その素直で無防備な精神。それ故に・・・如何に世俗に適応させ、硬い殻で覆った筈の自分本来の姿を見破られた。何となしに応えたインタビュー記事のたった数行で

「・・・そろそろ帰るわ。バカガキ共もトランクの中だしね・・・また来るからね。また・・・私の本当の姿を見てね・・・」

手を上げ、ボーイを呼ぶ斎は光の頭を撫で・・・パツと不敵な笑顔を作った

「旨い酒だった！オラさっさと明細持つてけハゲ！アタシのカードはブラック無限大！ジェット機だろーがヘリだろーが何だって買えるんだよ！アツハハハ！」

そう・・・来店時の彼女そのものに戻り勢い良く立ち上がると、慌てて駆けつけてきたボーイの頭を押さえつけ斎はリストへ歩き出した
「・・・あ、の斎さん・・・待って・・・」

何が何だか分からず斎を追おうと立ち上がった光に・・・

「来るなNO.1！拉致るぞ！見送りなんてベタベタしたのはアタシは大ツキライなんだ！さっさと次の席行け行け！仕事しろ仕事！・・・働かざる者食うべからずってな・・・！じゃあなまた来るぜ・・・！あ・・・濡れたぜ濡れた・・・！」

剛毅に笑い斎は多数の客に紛れて見えなくなっていた・・・光は無言を保っていた暴を振り返るが、彼は静かに一つ・・・首を振っただけだった

斎は確かに濡れていた・・・その白い頬に流れた一筋の泪によって

女傑（後書き）

斎社長の設定は白泉社「デトロイト・メタル・シティ」若杉公德先生の作品を参考に致しました（追記が遅れて申し訳ありませんでした）

失恋

「劉先生！こんばんは！お久しぶりです！」

幾つかの席を回り、トークをし、笑い――光は暴と共に劉――貴子の席に座り嬉しそうに挨拶をした

「光・・・元気そうね」

貴子はその笑顔を見詰め、微笑む。暴もまた笑顔を浮かべる。貴子の席にはヘルプはいない。厚いカーテンに覆われた静かな空間

「あ、あの・・・胡蝶蘭」最高でした！特にあの主人公が子供の頃から見守って来た少女を想つての独白が――」

かなり疲れている筈であるが、光は興奮したように貴子に作品の感想を述べていた

「そう・・・？あそこは実験的に挿入したのよ。孤独な戦いを続ける主人公の心情を表現する為にね・・・」

「今までの劉先生の作品とちよつと違って、かつこいい主人公がもつとかつこよく見えました！無敵の用心棒にも弱い所があったんだなあつて・・・でもそれが彼をもつと強くしてるんだなつて・・・つい泪が滲んじやつて――」

「コラ、ホストが酒も作らずトークばつかしてんじゃねえよ」

暴が話し捲る光の頭を軽くこづいて酒を作る。先程までのワインは既に空いており、今テーブル上にあるのはバーボンのロックグラスだった

「いいの・・・作品の感想を生で読者に聞けるなんて作家冥利に尽きるわ。それに疲れてるでしょ？私の席位ゆくりしなさい・・・作らなくていいわ――何も」

それは酒の事なのか、それとも――

「体調は平気なの？毎月大変ね・・・仕方の無い事だけれど」

慌てたように酒を作っていた光の肩が僅かに跳ねたが、そのまま笑顔で酒を差し出した

「光——お前サイン欲しいって言ってなかったか？」

暴は貴子の新作をテーブルの上に置く。それは先程ボーイに書店で買ってこさせた物だった

「あ・・・買って来てくれたの？私次の公休に買おうと思ってたんだ！だって買っちゃうとつい読んじゃうから。この間もそれで怒られちゃったしね」

嬉しそうにそのハードカバーの分厚い本を手取る

「サイン位構わないわ・・・ハイ、これでいいかしら？」

「ありがとうございます！嬉しいです！」

貴子は手際良く光の手にあるその本にサインをした

「——嬉しい？じゃあそのお礼と言っては何だけど、私のお願いを聞いてくれるかしら・・・？」

光は驚いた。貴子が、常に全ての物事に無関心でクールな雰囲気を持っていた貴子が「お願い」などという事を言い出すのは初めてだったのだ

「貴方、どうして彼——暴にそんなに執着されてるの？」

暴のサングラスの下の蒼い瞳が少々細められる

「親戚や兄弟ってワケじゃないわね。全く似てないもの・・・まさか親子じゃないでしょう・・・？」

貴子の眼鏡の奥の瞳が細められる

「暴とは長い付き合いだけど、彼が今まで他人に執着したのなんて見たこと無かったわ。それは貴方だけに向けられる。貴方の話題を出す、彼の完璧な鎧が剥がれる——一体何故なの？」

「貴子」

低い、深い声がそう鋭く発せられた

「お前らしくねえじゃねえか——他人に無関心なのはお前も同じだろ？」

「あら、私は作家よ・・・人間観察のプロよ。他人に無関心なんて心外だわ・・・一度疑問に思ったことは徹底的に追求しなければ気が済まないのが作家というものよ——私はそれで今の地位を築い

た」

暴の鋭い視線にも全く臆する事無く貴子は微笑む――引き下がらない、という強い意志

「――こいつは、俺と同じ施設にいたガキだよ」

困惑と驚愕の瞳を暴に向ける光だったが、それを穏やかに見詰めて話を続ける

「ただ――そんだけだ。こいつはろくでもねえ施設ン中で上等過ぎた。分かるだろこいつの雰囲気っつかさ……。ガキの時分からそれはあった……。目立ちすぎたんだ。歳も離れてるし、見ちゃいられなくて何度も助けた。その時からずっと守って来た――ガキの時の感情つてのは結構ずっと残るモンだろ……。そんだけだぜ・

・

貴子はバーボンを啜り、暴をまた強く見詰める――そんな説明では全く納得出来ない、と

「……。私は弱かったから……。いつも守ってくれました。先に中学を卒業して施設を出た後もずっと……。大人になってもずっと会いに来てくれて……。血は繋がってないけれど優しい、優しい兄です」

光は俯き――兄、という言葉にサングラスの中の瞳が変化したことに気付かずに――言葉を足した

「でも――私が中学を卒業する年に私を引き取りたいって、養子縁組をしたっていう方が現れました。とても優しいような人で――もう施設も出なきやいけないし、とても親切な方で進学もさせてくれるって……。私もっと勉強したかったし……。園長先生も賛成して下さったから――その方の養子になりました。ずっと自分には手に入れないと思っていた……。＜家族＞が出来るなんて夢にも思ってたから……。とても、とっても嬉しかったんです――でも」

対面の男が口を開こうとするのを、穏やかな瞳で制して話を続ける
「……。ある夜、眠っていたら……。お養父さんが私のベッドの中

にいました」

貴子は酒を呑む手を止めた

「・・・そ、れで――」

「もういいわ」

タン！とグラスが鋭い音を起てて置かれた

「――最後まで話そうか貴子？俺はその最低なクソヤローをブチのめして、俺の家にこいつを連れてった。そんな時位かなお前がヒット作出して売れ始めたのは――暫く一緒に住んでた。少しでも、ほんの少しだけでも・・・癒してやりたかった――その内ヤローが癌か何かで死んだ。ろくでもねえ借金残してな――勿論子供に親の借金払う義務はねえ・・・だがあのヤロー、巧妙にあの施設を担保に入れてやがった。その辺悪党は悪党なりに悪知恵は働いたんだな。勿論俺はそれを全部支払ったさ。その程度の金俺には何でもねえ」

低く乾いた――冷たい声が貴子の耳に届く。その耳に手を沿え、一つ溜息をつく

「私――申し訳なかったんです。私達が育ったあの施設を――例え戸籍上だけであっても・・・私のお養父さんが卑怯な事をして滅茶苦茶にしようとした・・・それを全部払ってくれた――少しずつでもそれを返したかったです。お金だけじゃない、私を癒してくれた、ずっとずっと守ってくれたこの人に――」

だから彼と同じ業界に入った。彼への負債だけでは無く、その強い心に少しでも近づけるように、少しでも彼のように強くなれるように――自分自身が強くなる為に

「そんなモンいいって、気にすんなって何度も言ってたがコイツ妙な所で頑固だからよ、全く困ったモンだ」

その場の重い雰囲気振り払うかのように明るい声が響いた――もう、この話は止めようと、もういいだろう、と

「そんな言い方しないでよ！そ、それはまだまだ助けて貰わないと私一人前じゃないこと位分かっているよ！でも一生懸命やってるん

だからさ！」

桜色の明るい声が、それに呼応するかのように響く――そうだ、今もう私は立ち直って明るく元気に生きているのだから、と

「貴方は立派なNO.1よ。自信をお持ちなさい」

貴子も精一杯の明るい声を出す――その言葉に精一杯の謝罪の気持ちを含めて。詰まらない嫉妬心から貴方の過去を曝け出し傷つけてしまった――最大限の謝罪を含めて

「ずっと……助けて貰いなさい――守って貰いなさい。それで貴方達二人とも……きつと旨く行くわ」

貴子はサングラスの男の、見える筈の無い瞳を見詰めた。彼の瞳が見える筈が無いことは、自分の瞳を受け止めてくれないことは分かっている――無駄とは分かっているけれど

彼が自分からは絶対にサングラスを外さないこと、は――ずっとずっと前から分かっていた筈だもの

「……敵わないわね」

クスリと唇の端を上げて笑い――貴子は呟いた

「そろそろお暇するわ――明日朝イチで担当に送信してあげれそう……いいものが書けるわきつと。貴方達のお陰ありがとう。

出来上がったら一番にお見せするわ。私の代表作にするように頑張るから――また来るわね……その時はまた楽しくお話ししましょう――三人で」

突然のその言葉に二人は驚いたように貴子を見るが、微笑みは瞬時に消え常の無表情で優雅に貴子は席を立った。見送ろうと連いて来ようとする二人を柔らかに制止して、ボーイに勘定とタクシーの手配をさせた

私が今まで納得のいくものがどうしても書けなかったジャンル――

ー恋愛

それはそうよね。状況のみに関心を示して、その状況の根本である人間の心理に無関心を決め込んでいたからだわ

自分が傷つきたくないから

敢えてそれを誤魔化して

ーーー逃げていた

書ける訳無いわよね。本当に愛している男に自分の感情すら伝えようとしていなかった女に

本当に意気地無しな女には

(ーーータイトルはどうしようかしら・・・まだ決まってるのよね)

ネオンが次々と移り変わっていくタクシーのウィンドを見詰めながら貴子は考えるーーー何故だろうか、ネオンが揺れている。視界の両端から歪んでいくように、何かが瞳に滲んでいる

「失恋」っていうのはどうかしら

・・・少しチープね

強烈なる刺激

ビッグ・ステージに眩しいほどの照明が照らされ――馬の嘶きが響き渡った

何事かと――クラブ中の客達がステージを見ると、其処にはブラウン・ヘアーにサングラスを掛けた細身のアーティスト

「The highest show time today」

その声が響いた瞬間、轟音と共にダンス・ミュージックが流れ出した。今年ミリオン・セラーを出した彼の代表曲<Unspoilt>数十人のダンサー兼ホスト達がステージ上に出現し、一流のディスコ・ダンスを繰り広げる

歓声が上がり――クラブ内は最高潮の盛り上がり包まれた

「皆様――！今宵は数ある名店の中この<Yamatō-nadeshiko>をお選びの上での御来店誠に誠にありがとうございます――！」

数十人のホスト達の中から一際背の高い男が客に向かって声を張り上げた――その人物にスポットが当たる

「わたくし、当クラブ・オーナーのツマラナイヤツで御座います――！名乗るほどの者ではございませーん！」

その男は何とも奇妙な格好をしていた。本来ならば高級スーツに身を固めるべきであろうその筋肉質の体は、黒いタンクトップに黒いネクタイだけを絡ませ、土建業の男性のような緩んだズボンに、スポーツ刈りのような黒い髪――何故か目の周囲にはモザイクのように照明が当たっていた

「劇団四屋トップ女優様・華火様！素敵なお芝居を拝見させて頂いております！大変難しい役どころとは存じますが、全ての役がお立ちになられて個性的でございます！この国の演劇界を背負って立つ美しき女優に盛大なる拍手を！」

パツと華火のテーブルに照明があたり、周囲の客達は一斉に拍手を送る。華火は仕事上慣れているのか、苦笑しながら手を振った

「可憐なる資産家令嬢・弥子様！貴女様の動物愛護精神は、世俗に塗れたわたくしのような者にも何とも微笑ましく、薄汚れた心にもじんわりと温かく染み渡る崇高なる御心！キレイゴトだけでは済まぬそのご活動！陰ながらご声援申し上げます！」

弥子のテーブルに照明があたり、驚き恥ずかしがった弥子は隣に座る翔の背中に隠れた

「大ベストセラー作家・劉丁一先生！そのご作品全てに共通する、貴女様の豊富なる語彙！秀逸なる構成力！確実な説得力を持たせるストーリー展開！出版業界の救世主への賞賛を捧げさせていただきます！」

劉——貴子は既に帰っていたが、オーナーは構わず拍手と喝采を送る

「ダイ・レコーズ斎社長！現在貴事務所一押しのアイドル・ユニット「Winking」は素晴らしい美少女二人のユニット！ウエツト&クールな美少女二人の徹底的な美しさを前面に押し出した企画力！既にわたくし私設ファンクラブを作って応援させて頂いておりま——す！音楽業界を正しい方向へと導く女傑、斎社長に尊敬の拍手を——！」

「この国最高の頭脳！この素晴らしき世界を静謐なる論文で美しく照らし続ける！伊勢政治教授にも盛大なる拍手を——！」

音楽が一層の高鳴りを持って響き渡る。彼にとっては客がいようがいまいが全く構わないようであった

「そ——して！我が盟友！ネオ池袋「Poke-danz」総支配人、キャンサー・G様！本日はご開店誠にオメデトウ御座います——！さあ！盛り上がって行きましょう——！」

G——豪のテーブルには、彼自身は未だバー・カウンターであったが女性達がいた。彼女達は勿論心得ている。照明があたった瞬間全員が立ち上がりステージに乗って踊り、唄う。何とも妖艶で派手

なステージに、クラブ内は最高潮の盛り上がりだった。アーティストの達者なラップ韻のMCに合わせて殆どの客が立ち上がり音楽に合わせ踊り始めた

「すつげえな今日のオーナーは・・・どうしちゃったんだ？カンペキにスノウ・パウダーキちゃってんじゃねえの？」

踊る女性達に囲まれながら翔に話しかける黒男。翔はこのような雰囲気苦手な弥子をレストルームに行かせ、適当にダンスを合わせながら近づいてきた黒男に視線を向けた

「オーナーらしくないよ・・・あんなハシヤギ方はね・・・いつもはもの凄く陰気でステージなんかには上がらないのに・・・何か、あるね」

「・・・そうだなア。どしちゃったのオマエ等のオーナー？もうボケてきちゃったの？クスリと酒のやり過ぎでアタマリパツパ？」
いつの間にか二人の背後に豪が居た。カウンター・バーから戻って来たのだろう

「ええ、なんかヘンですね・・・何かこの後にありますね恐らく・・・」

翔の予感当たった

「それでは・・・！この年末週末最高の夜に、素敵なお客様方々に素敵なプレゼントをさせて頂きます！」

轟音を齎していた音楽が瞬時に止まりパツとダンサー達が散った

「ステージ上にはオーナーと、その隣にたった一人

「本日初顔見世！」

全ての客達がその・・・黒一色のスーツに非常に華奢な身を固め、照明に照らされる漆黒の黒髪を持つ人物を見た。俯いている

「<月弥^{ツキヤ}>で御座います！」

オーナーのその言葉と共に、その黒髪の人物は俯いていた顔を上げた
「・・・不自然な程の透き通る白い肌、一本一本植え込まれたような細い黒髪、濡れたように光る紅い唇、それよりも紅い血のような瞳

よく造り込まれた人形のような、異世界から来たとしか思えない――

氷のような無表情の――美少年だった

> i 2 0 8 4 ― 3 2 2 <

「来週末初勤務で御座います！ご贔屓の程、ご指名の程、どうぞどうぞ重ねて宜しくお願い致します――す！それではこの後もお楽しみください――い！」

オーナーの退出の礼と共に轟音が大きく弾け、ダンサー達が一斉にステージ中央に集まる。オーナーと黒髪の美少年はその渦に巻き込まれて一瞬で見えなくなつた

「――オイ・・・何だ一体ありやア・・・？」

騒々しいほどのダンス・ミュージックが溢れるホールから三人の男は少々身をずらし、比較的静かなレストルーム前へと無言で移動した後――黒男が口を開いた。少々の震える声で

「――き、聞いてない、よ・・・僕は。君もだる黒男？何だあの子・・・？」

翔の声も少々上ずっていた。感情的な黒男はともかく、翔は笑顔の中に常に冷静さを保っている男だ。その声が震えているのだ

余りにも、ステージ上の紅い瞳が鮮烈だった

人形のような凍った無表情に彩られた、真紅の血の如き紅い瞳に貫かれたかのように

彼等は――衝撃を受けたのだ。今まで体験したことのない程の

戦慄

「――どういうことだ・・・あんのヤロー・・・」

硬直したような二人のホストを一瞥し、豪は呟く。豪の心中は彼等とは全く違う。豪が疑問に――形容し難い怒りのような感情の源は――

あの黒い美少年が、NO、と余りにも瓜二つなこと

「Ill Stimulation is added with
stability・・・安定に刺激を加えようってのかよ・・・
？」

突然の異世界から来た美少年の視線に確実に煽られたホルルの客達は、夜が空けることを忘れてしまったかのように踊り、呑みーー！ただその本能に操られるまま体を動かしていた

太陽と月（前書き）

実在の人物や実際の地名等とは一切関係がありません

太陽と月

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」閉店時刻――

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」の多数の華で飾られた豪華な出口前は、多くの女性客、それを見送るホスト達、アフターに消えていく客とホスト、呼ばれ、また出待ちの多数のタクシーなどで混乱に近いものだった。タクシーの運転手達もこの不況下では客を確実に拾えるこの店の前は狙い目であり、タクシーの縄張り意識も強いこのネオ新宿で、この店の専属にでもなれば安定した収入を得ることが出来る。多数のタクシーに客が消えていく喧騒の中、一台のブラック・シーマが弥子の前に止まった

「弥子ちゃん、じゃあ気をつけて帰るんだよ。まあ君ん家の運転手さんの運転は全然心配してないけどね」

翔は後部ドアを開け、少々の眠気を表している弥子を車中に促したが――弥子は何故か中々入ろうとしなかった

「・・・あの・・・来週会合があるんです。私が役員をしている団体の・・・私皆様の前でお話することになってしまつて――」

店ではそのような話題は一切出なかった。弥子は縋るような視線で翔を見上げる――運転手は翔が扉を開けた為か車中から降りては来ていない

「えーそうなの？！すつごいじゃん！でも弥子ちゃん恥ずかしがりやさんだから心配だなあー」

翔はにこにこ弥子の手を取り、頑張つて！と掌に軽く接吻した
「・・・そ、うなんです・・・今から緊張してて・・・だから、だからあの――翔さんが見てて下さればきつと上手に出来るかなつて――私・・・ごめんなさい・・・」

掌に感じる柔らかい唇の感触――離さないで欲しいという、視線

「うん！勿論！ケーキとお花持つて応援に行くよ！弥子ちゃん？僕が見ててあげるんだから、失敗しちゃったらおしおきしちゃうかな」

ふざけたように明るく、もう一度車中に促す。雪がちらつく外の冷気は可憐な女性には厳しすぎるだろうと

「・・・あ、ありがとうございますー頑張ります、私」

弥子が翔の胸を両手で弱弱い力で掴んできた。そしてその小さな顔を屈んだ翔の耳に寄せるーそのような行為をする女性ではない。ある種お目付け役でもある運転手には決して聴こえないようにする為のー行為。震える唇が開いた

「ーその、後・・・一緒に・・・」

聞き逃してしまうかのような、小さな儚い声だった。だがその言葉は純情な弥子にとつては精一杯の勇氣と覺悟を持つて表した感情、伝えたかった恋情

「優しい傷、つけて欲しいのか？弥子」

再度ー低く男性的な声が、真っ赤に染まった弥子の耳に吹き込まれた

「・・・はい・・・」

「じゃね！楽しかった！アフターでもう少し呑みたいけど・・・」

華火は黒男に抱きつき、どう？という瞳を向ける

「公演までオトコは我慢しとけ華火、稽古場に酒の匂いなんざ入れるような役者最低だろが？ー大成功すんだろなお前の舞台。今のお前見てりや分かるぜ・・・オラ、風邪引くぞ。役者が公演前に体調崩したらどーすんだ？ちゃんとファつけるっつ」

笑いながら強く抱きついてくる華火の首回りのファを巻き直す

「そーいう意外に優しいトコなんかタマンないのよ！もう！何よ公演終わるまでアタシを放っておく気なの！？」

するとー黒男は長い黒髪を乱暴に掴み細い腰を引き寄せー

深く唇を重ねた

「――ん・・・・ちょ、つと――皆、見てる――でしょ・・・」
周囲には多数の客やホストで溢れている。実際見送り時にキスや抱擁を繰り返すのは不思議な事では無い。しかし――華火のハイヒールが地から離れ浮き――非常に深く長く重ねられた接吻は周囲の注目を集めた

「今はコレで我慢しとけ。公演が終わったらご褒美にたっぷり可愛がってやる」

唇を外し、腕の中の体を地に降ろし――至近距離で黒男はからかうように言った

「――ばっ・・・」

悔しげに手を上げた華火だったが、その手はゆっくりと下ろされる
「それまで他の男なんざと遊ばねえ方がいいぜ・・・？我慢すればする程――タマらねえだろ？」

その何とも――卑猥な低い言葉に華火はバツと顔を背け足早にタクシーに向かった

「じゃあな華火！公演バツチリキメたれや！チケット送れよ？俺はその後の公演バツチリキメてやつかな――！」

ハハハ、と笑いながら、気の強い女性が自分の表情を見られなくてタクシーに逃げ込む姿にもう一度揺さぶりを掛け――黒男は離れていくタクシーに向かって手を振った

「オーナー、お疲れ様でした」

未だ店の出口は喧騒に包まれているが、翔は足早に店内に戻り店奥のバー・カウンターに向かった。そこには予想通りオーナーが居た。彼は終礼前にここで必ず一杯飲んでいる。カウンター内には小千が居た。シェイカーを振ってカクテルを作っている

「おう、おつかれ。どうしたアフター行かねえのか。お嬢様はちゃんとパパントコ帰したろーが、他の客いるだろ」

翔は軽く会釈をしー予想通りにオーナーの隣に座る黒い美少年に視線を向けた

「他のお客様はお帰りになって頂きました。今はアフターをする気分じゃありません」

黒いスーツを身に纏い、目の前に差し出されたギムレットに手もつけず身動きもしない、彼ー本当に動くのだろうか？声を出すのだろうか？あの血の様な瞳は果たして人間の瞳か？ーカラーコネクタなどには全く見えない

「お前の気分なんか知るか。とっとと仕事しろ。NO.10以内が終礼に出るつもりか？ウチで枕しなくていいのはNO.1だけだ」

「お疲れ様ツス・・・」

いつの間にか翔に背後に黒男が立っていた。彼もまた華火を見送った後、他の客の見送りをこなしーバー・カウンターに來たのだ。目的は翔と同じ。その細身の後姿を見て予想範囲内の翔の行動に、彼もまた自分と同じ感情からここに來たのだと確信する

「お前もかよ・・・おいガキ共、俺の方針に従えないっつーならいつでもいいぞ辞める。客なんざ幾らでも連れてっつーぜ。好きにしろ」

何とも陰気で、冷たい言葉を吐くオーナーだった。そのふざけた服装とは裏腹に何の感情も持たないような乾いた雰囲気を持つー「- - - 申し訳ありませんオーナー。お聞きしたいことがあるんです」

翔が意を決したように口を開いた。ここまで地位を築いた最高の店を辞めるなど考えられないことだ。逆らうつもりはない、とその穏やかな笑顔に込める

「俺もツス、オーナー・・・さっきのステージなんスか？その、ガキー何なんス？」

黒男も会釈をしながらオーナーの隣に座る微動だにしない人形に視

線を向ける

「……ん？この子か？」

オーナーは二人の男が凝視している美少年の肩に手を置く——ピクリ、と人形が動いた

「月弥^{ツキヤ}さん。本日契約。来週末に店に出す——今日は顔見世と店の雰囲気慣れさせてやる——って思ってたなあ」

その黒髪に野太い指を絡め——意外な程の優しげな声でオーナーは小さな顔を覗き込んだ

「触るな」

喋った——変声期が来ていないと思わせるほどの、非常に高い少女のような声

「どうだキレーだろ？」

人形にしか見えない彼が言葉を発した——二人の男は目を見開いたように凝視していたが

「——す、すげえ美少年ツスね。勿体無いんじゃないかそのやたらキレーなオンナみてえな黒髪切っちゃまうのは……」

黒男は取り繕うように、軽口を叩く。認めたくない、気付かれたくない——自分が人形に見惚れていることを

「——や？こいつはNO.10からだ。髪は切らせない」

オーナーは当たり前のようにそう言い放ったが、驚いたのは二人だ
「——君、どこの店にいたの？君みたいな美形なら業界で噂になる筈だけど知らないなあ……余程お客様持つてるんだね？」

翔は人懐こい笑顔を浮かべ、社交的に美少年に話しかけるが、彼は翔を見ることがせずギムレットを一口に飲み込んだ

「——や？こいつは業界未経験。だから今日店を見せてやってたんだ」

——？どういうことだ？二人は他店から多数の客を連れてこの店に入店した為、髪は切らずにいることを許された。既存客への営業に関わる為であり、それは店側も認めている。勿論その月内に順位を順調に上げ、今の地位を築いている。だがこの美少年は未経験者

というのだ。勿論客もないであろうし、規律を徹底させることに異常な程の執着を持つオーナーが、彼に至ってはそれを曲げるというのだ。――いや、もう一つ特例はあった。現在のNO・1が入店した時も同じような扱いだった。しかしそれは当時のNO・1である非常に影響力を持つ男が後盾に付いたからであつた筈。この美少年にもそのような後盾がいるというのか

「――へえ・・・そういうことかよ・・・お前よっぽどオーナーに気に入られてんだなア？」

黒男は会得したように美少年の隣に座る。――そういう、ことかと。男性社会ではまあある、行為。

「先輩に挨拶位出来ねえのか？この世界は礼儀と客好みの笑顔を作ることが一番だぜ？お前笑えるのかよ？」

あからさまに向ける敵意。――黒男は認めたくないのだ。しかし一種侮辱的な言葉を掛けられても、冷たい無表情は微動だにせず黒男を見ることも無かつた

「聞いてんのかよ teme！」

そのスーツの胸倉を黒男は掴みあげた。その乱暴な行動を翔は止めさせようとオーナーを見るが、彼は薄い微笑を浮かべているだけ。――この世界にはホスト同士の暴力沙汰などは当たり前だ、完全な男性社会なのであるから。――しかし余りに相手は華奢で歳若い少年だ。――つたが

「離せ」

黒男の大柄な体がビクン、と跳ねた。――少年の紅い瞳が凄まじいほどの鋭さを持って睨みつけて来たからだ。――射竦められている

「NO・4だつたかお前・・・？フン、つまらない男だな。たつた一人で寂しくて寂しくて仕方なくて手当たり次第に女抱いて、抱いた後結局一人ってコト気付いて虚しく彷徨ってるだけ。――必死こいて取り繕ってる荒々しい行動も虚しい自分を隠すだけだろうが。――中身の無い、からっぽの男だお前」

黒男はその高い声で発せられる言葉一つ一つに、サングラスを外されたような気がした。全てを暴かれたような気がした。余りに的確に――自分自身すら気付いていなかった本心を全て見透かされたような――彼は決してオーナーのお手つきのようなモノではない、そうじゃない――

「ま、あまあ止めなよ黒男！君もホラ・・・ホスト同士の争いは店全体に良くないんだからさ！」

完全に固まった様な黒男の手を外させ、翔は努めて明るく少年の肩を抱こうとしたが

「馴れ馴れしいんだよ」

そう、一喝され――その鋭すぎる視線に彼もまた射竦められた

「NO、3、お前もだよ。その嘘臭い作り笑顔で本心隠してるようだけどバレバレだよ。先の先を計算して女騙して操って――何が楽しいんだ？そんなことでしか優越感を持てないなんてつまらない男だ」

アッハハハ！と堪えられないようにオーナーが頭を押さえて笑った。感情的な黒男はともかく、常に店内では笑顔を浮かべている筈の翔までもがその素顔を曝け出して硬直したように突っ立っているのだ――

「痛い所突かれたなあ、お前等。どうよこの子？カオもそうだがNO.1と同じだろ？初対面でも一発でそいつの本性見抜いちゃうだろ？最もあつちはそれをすげえ穏やかに癒すのが得意だが、この子はお前等みてえに氷みてえに固めちまう。凍らすのさ――正反対だ」

翔と黒男は確信した――こいつは、売れる

自分の順位は変わるだろう、いや自分だけではない――全ての安定が崩れ去る

NO、1すらも――

「好き嫌いは分かれるだろーがな・・・なあ小千？こいつメチャクチャ客つくだろな？テメエの一番痛いトコ凍らされて――自分を

見詰め直したい客と・・・この無愛想でとんでもなくキレイな力才変化させたいっつー客がな」

「ロールプレイングをしますか、月弥さん・・・私が女性客として、腕時計をプレゼントされたら貴方はどう返答致しますか？」

オーナーに声を掛けられ、無言で喧騒を見ていた小千がその腕に嵌めているロレックスを外し、少年――月弥に差し出した

「そんなもの、いらない」

予想内の、その無愛想な返答

「どうして？私が一生懸命貴方の為に選んだのにどうして受け取ってくれないの？！貴方みたいな愛想の無いホストなんてもう嫌！私帰るわ！」

いきなりオーナーがその筋肉質の身を振り、女性のように高い声で女言葉を発し席から立ち上がろうとした――女性客のつもりであるのが非常に気味が悪い

「帰るな」

月弥はオーナーの袖を掴み、じっと見上げてきた

「受け取ったよ・・・時計じゃなくて、私の為に選んでくれた――アンタのその瞳」

何とも甘い言葉。翔も女性客からの贈り物には同じような言葉を返すが――氷の美少年の言葉はその外見や雰囲気から全く意味合いが違うものになった。決して手に入られないのに、その身を惜しげもなく晒し光り続ける――天高く浮かぶ月のような存在が、絶るよーに見詰めてきて

「ありがとう」

濡れたような紅い唇の端が上がった――余りにも対比が激しいその氷の微笑

「100点だ。お前のその冷たい笑顔見たさに客は通いつめるだろうな。とつとこいつら抜いちまいな」

オーナーが元の口調に戻り、その小さな耳に紅いピアスを嵌めた。それをうざったそうに身を振り元の無表情を浮かべ、月弥は自分を

凝視している二人の男に一瞥をくれる

俺の為に笑え、俺にだけその極上の笑顔を見せる――と、黒男は強く思った

俺の思い通りにこの氷の人形の感情を動かしたい――と、翔は強く思った

月弥は二人の男の心中など全く興味が無いように、ホールへと視線を移動させた

「お前等にも、こんな店の順位なんかに私に興味ねえんだよ。私が興味があるのは――」

ホール中央――背の高い男と多数の美女に囲まれながら、客の見送りに出口に向かう――

「NO、1だけだ」

安定は停滞を生み、停滞は衰退を生み出す――しかし、そこに刺激を加えれば

競争が生まれ、混沌が生まれ、焦燥、憧憬、嫉妬・・・

そして最後に、純化された発展が生まれるだろう

世界有数の繁華街、ネオ新宿・ネオ歌舞伎町一のホストクラブ「Yamoto-nadeshiko」

伊勢教授の経済論をオーナーは知ってか知らずか、それを実践した。衰退はあり得ない――強烈なる刺激を加え益々の発展をするであろうこの店には、これから始まるであろう競争と混沌を象徴するが如くに、今宵の満月が照らされる

もうじき月は薄くなり、太陽が浮かぶだろう――ネオ新宿

太陽と月の壮絶なる競争がこれから始まる―――ネオ歌舞伎町

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」

癒えぬ傷（前書き）

この部分以降、敢えてキャラクター名を記載しておりません。作品の雰囲気を出す為ですが、少々読みづらいとは存じますがご了承下さい。文章からキャラクターが連想されるように表現しております

癒えぬ傷

「おっしやー！ー！お前等はコレで帰れー！ー！明日遅刻すんじやねえぞー！ー！領収書はちゃんと貰えよ！」

次々と客達が車中に消えていく中、20人の美女を引き連れたキャンサー・G――豪は周囲の美女達に現金を渡し大声で張り上げた「現金主義の豪ちゃんは今払いもいー！ー！の！気を付けて帰れよ！明日もよろちくー！ー！」

「ご、豪さん・・・酔ってらっしゃるんですか？大丈夫ですか・・・？」

その華奢な肩を抱かれながら少々覚束ない足取りで歩む豪に声を掛ける

「んー！ー！酔ってないよー！ー！」

「ボス、酔ってるヨ。珍しいねボスが酔うなんて。いつもはオールド一気シテも酔わナイのにネー」

そう言う当人のグレイシイも覚束ない足取りで渡された金額を美女達に振り分けている

「わ？！しつかり・・・」

ぐら、とコンクリートに均衡を崩した豪の大柄な体が落ちそうになり、必死にその重さを引き上げようとした

「へーいき！ごめんねー！俺楽しすぎてねえ・・・今日は楽しかったよー！大丈夫だよ俺自分の車で帰るからさー」

ごめんごめんと笑って豪は身を離そうとした

「な・・・何仰ってるんですか？そんな状態で車の運転なんて絶対ダメですよ！豪さんに何かあったら・・・」

その離れて行こうとした豪の手を取り、注意する。このような状態で運転などしたら確実に事故を起こすだろう

「代行呼びますから・・・」

「・・・代行キライなの豪ちゃん。ボクの愛車は誰も乗せませんよ

「！」

「イーもう・・・私何度も豪さんのメタリック・シルバーのセルシオ乗せて頂いてますよ。酔ってますね・・・」

「んーそうだっけ？でも代行はイヤなのイー！」

豪は真剣な表情で見上げて来る小さな顔をじっと覗き込むイー貴方が心配だ、と訴えてくるとこまでも蒼い瞳

「じゃ、じゃあタクシーで・・・」

「タクシーで帰るのは遊び人豪ちゃんの流れ儀に反するのだー！」

駄々っ子のように声を張り上げた豪は美女達に乘れ乗れと強引に押し込むようにして、またもや支えようとする小さな手を振り払った
「あーボス、ヨッパライだネーアハハ楽しいね。このクラブでお話する時だけだっていつも言ってるヨ。オレが本当に酔えるのはってイーいつつもネー・・・」

그레이シイは豪を必死に追う小さな背中を見てイー呟いた

「ネー！ワタシ達帰るヨ。ボス宜しくお願いシマースねイー！」
そう声を張り上げると、 그레이シイ等美女達はタクシーの扉を閉め去っていった

「イーご、豪さんってば・・・あ、じゃあ私のマンションすぐですから、そこで少し休んで下さい」

그레이シイ等が去って行きイーもう店からかなり離れたネオ歌舞伎町のネオンの中、やっと追いついた豪のコートを掴みながら提案する。店には後で連絡すればいい。他の客への挨拶は済んでいる。
今日はアフターも無いし、豪なら何度もアフターをしているのだ。
店側もそれは熟知しているだろうし問題無いだろう。最もそれは美女達と皆であったがイー店が在籍ホスト達の為に用意しているマンションは歩いて5分程だ

「・・・んー・・・アレ？どうしたのお店戻りなさい。終礼あるでしょ？俺ももう少し飲んでから帰るからさ、心配しなくていいよ。運転なんかしないってば。テキトーに女んトコしけこむからいいよ・・・」

追いついて来て縋るように見上げてくる心配そうな顔を見下ろして、豪は陽気に笑う

「だとしてもそんな足取りじゃ・・・あ、あそこですから私のマンション・・・」

繁華街の裏手、豪奢なエントランスが見える高層マンションは確かにすぐだった

「とにかくお水とか飲んで休んで下さい。私は豪さんが部屋に入ったらすぐお店戻りますから・・・」

携帯を店に忘れて来たのか――胸ポケットに手をあて、そのふらつく大きな体を必死に支えながら豪を促した

「・・・しつかり・・・」

ぐったりとした豪を支え、エレベーターから降りる。共用部分のカーペットの上を歩きながら部屋のキーを確かめる

「・・・何で豪ちゃんこんな酔っちゃったんだと思いますか・・・？」

呟く豪の言葉を酔っているとかすりどきと笑い、ガチャリと扉を開けると玄關灯が自動で点灯した。内扉を開け、リビングに入る。20帖程のリビングは自動灯では無いので、室内は不夜城であるネオ歌舞伎町のネオンに照らされ薄暗いが一足元や表情は見える

「そうですね、初めてですこんな豪さん見たの・・・お疲れなんですネきつと。だからお酒回って酔われたんですよ」

豪の大柄な体を白いソファに降ろし自分もその隣に腰を降ろし、ふうと一息をつくとも豪の額に手をあてた。この冷気に冷えた自分の手はきつと冷たくて気持ちがいいだろうと。大規模店の開店準備にこの数日奔走し、疲れていたのだらうと推測する――豪の顔は酔っている為か酷く熱を持っていた

「・・・いや、お前のあの言葉に酔った」

ふ、と今までの酔った感じとは違う低い冷静な声が発せられるが、それは酷く小さな呟きであつたので碧のピアスで飾られている耳には届かなかつた

「ちよつと待つてて下さいね。氷水作つてきまー」

立ち上がるうとした細い腕がー武骨な手に掴まれた

「客の酔つたフリに騙されて部屋に入れるなんぞ、NO・1失格だぜ？」

「――！」

抱擁

「俺がお前のマンションの場所把握してないなんぞ・・・あり得ねえだろうが。その方向に誘導したんだよ。お前どうせ俺を追つて来るだろ?・・・お前の携帯は俺のバッグの中だぜ」

華奢な体は、長い腕と大柄な体に隠れた

「・・・や、めて下さい!・・・なつ・・・何するつ・・・んですか?!」

豪は無言だ

「つーー離し、て・・・」

必死に体を捻るが、その大きな手に覆われた肩は微塵も動かない

「豪さん!・・・わ、私はー男ですよ!」

そのような嗜好は豪には無い筈だつた。それを確信していたからこそ部屋に入れたのだ

「男?」

バツ、と体が離れ、ソファに押し付けられーシャツの胸元が掴まれた

「きゃあああ!?!」

開かれた胸元ー厚い生地に覆われた微かな隆起

「俺ゲイの気はねえよ、お嬢ちゃん?」

覆い被さつた下のー少女は震え涙を一筋流していた

「やっぱなあ・・・大したモンだ。女つてのは同性ならどんなに整形しようが性転換しようがー敏感に気付くモンだが・・・ウチ

の女共にも気付かれず客にも気付かれねえで、完璧な美少年演じてたってワケか――？」

瞳を強く瞑り、諦めたように抵抗しない少女の頬に流れた涙をそつと拭う

「あいにくだが、俺は人間観察のプロだ。あんのオーナーのヤロー・
・このネオ歌舞伎町を舞台にこんな可愛いお嬢ちゃん使って壮大な八百長芝居してたってワケか・・・・」

後半は呟きに近い

「・・・誰にも・・・言わないで・・・お願い・・・」

ふと、消え入りそうな涙声が耳に届いた――震えている

「――な、俺のマンションに来いよ、お前」

先程までの不敵で危険な声色は消え去り、はだけさせた胸元をそつと元に戻しながら――限りなく優しい響きに变化するその低い声
「金根性の渋い男相手の、初期投資の高いホステスよりも、嵌らせるのが容易で実際金掴んでる女相手のホストの方がその気になりやあ万倍も実入りがいい――金だろ？俺が全部片付けてやる。お前の為なら何でもしてやるよ――だから・・・だからよ、俺の傍にいてくれ・・・」

涙を流し続ける頬に手をあて、柔らかい髪を梳く。震える華奢な体を安心させるように、非常に優しく

「・・・やめ、て・・・下さい――い・・・や・・・」

痛々しいほどに震え、涙が流れる顔を両手で隠す少女の儂い言葉が耳に届く――豪はその華奢な手をそつと外させ、片手を自らの頬を覆うようにあてさせた

「誤解すんな。女になれって言うてんじゃねえ――何もしねえ・
・出来ねえよ――安心しな」

強く背けられた綺麗な顔を、頬に手をあて、ゆつくりと自らに向かせる――瞳はまだ閉じたままだ。何度も言葉を投げかける。その女性としての肉体を望んでいるのではない。そのような事では決してない――と

「そーじゃなくなてな．．．俺が帰ったらお前がメシ作ってておかえり、って言ってくれて．．．一緒にメシ食ってＴＶ見たり、今日あったことなんか話したりよ．．．休日はそうだな．．．お前の作った弁当持ってどっかドライブでも行ってーードコでも連れてってやるよ．．．お前の欲しいモンなんだって買ってやるな．．．流行の服でもアクセでも何でもさ．．．映画見たり、海とか山行ったり、スポーツ見に行ったりよーー楽しく、さーー」

少女は混乱と恐怖の中、その声色の変化にある程度の冷静さを取り戻し始めた。彼の声は、仕草は自分に安心しろ、俺を信用しろと必死に訴えかけて来ているのだ

「妹を引き取ってーー一緒に暮らすことだけが俺の望みだった」

彼はその死んだ妹との幸福な生活をーー望んでいるのだった。少女に女性としての役割は全く望んでいなかった

「いつつもお前．．．逢いに行く度俺がこの話するとさーーすっげえ喜んでくれたよな。じゃあ私お料理もつと勉強するから、って．．．お兄ちゃんの助けになるんだ、てーー一緒に暮らすんだって．．．な？その為なら、お前の幸せの為なら俺は何だってしてやるよ。幾らだって稼いでやる。お前が幸せに笑ってくれるならーー」

陶醉したように彼は呟いていた。彼の脳裏には幼い妹がいるのだろう。彼女に話しかけるように、体の下の華奢な少女に語りかけるようにーー

「なあーーお前本当は死んでなんかいなかったんだろ？あの凍った土手でーー下着脱がされて目見開いて硬直してたーーお前なんて嘘だろ？俺は夢でも見てたんだろ？最低な悪夢だったんだーーお前は本当は生きてて、こんなに綺麗に成長して俺の前に現れてくれたんだろ？．．．なあ、そうなんだろ．．．？」

その記憶と感情が混在し、混乱している。あのクラブで少女の美しい言葉を聞いてから、彼の精神は完全に妹と彼女を重ねた。よかった、生きていたんだーーと

「お兄ちゃん、強くなっただぜ．．．？俺はもう昔の無力なガキ

じゃない」

ぽつり、と少女の頬に何か温かいものが一つ、落ちた。その感触にゆっくりと瞳を開ける

「・・・寒かったろ？ 苦しかったろ？ 怖かったろ？・・・ごめんな・
・守れなかったー！ ごめんな・・・・弱いお兄ちゃんで・・・」

その本性を隠すべきサングラスを伝い溢れー！ 幾つも幾つも、落ちてくる。常時の彼とは全く正反対の弱弱しく震える言葉、手、体ー！ 少女の震える手がそうとサングラスを外す

「・・・」

そのー！ 混血の風情を持つ、掘りの深い整った素顔ー！ 漆黒の深い闇のような鋭く黒い瞳からは、止め処なく泪が溢れていた

「・・・償わせてくれ・・・」

嫉妬（前書き）

キャラクター名は記載しておりません。作品の雰囲気を出す為の表現です。ご了承下さい。キャラクターが連想されるように表現しております

嫉妬

「そいつはてめエの妹じゃねえ」

豪の首の側面の急所に、太い親指と人差し指が押し込まれた

「いい加減目エ覚ましやがれ。ハツパでもキメてんのかお兄ちゃん？」

豪の黒い影の背後――少女の視界には最も信頼出来る、黄金色で構成された男が立っていた

「――ま、予測してたが・・・何でこの部屋の鍵持ってるんだいNO・2？」

視線を背後に向け首を捻り指を外させ――豪はゆっくりと少女から離れ立ち上がった。ソファに横たわる少女を背後に、金髪の男と真正面に向かい合いその黒い瞳を鋭く向ける。同等の背丈の為その視線は同じ高さに絡み合った

「俺の大切な妹にろくでもねえ虫つけとくワケにはいかねえな・・・分かってんだろうなア？」

「ああ、上等だ。真正面から来いよ――いつでも受けて立ってやる・・・こいつは俺が守る」

フン、と鼻で笑い豪は胸からスピアのサングラスを出すとそれを掛けた

「――安心してくれな・・・俺は口は堅エし、お前が事情があつてあそこにホストとして勤めてるんならそれはそれでいい――怖がらせちまって本当に悪かったな・・・俺は暫くあのクラブには行かねえ。代わりに毎日女共行かせる。勿論お前を指名だ――許してくれるかどうかは分からねえが、もし・・・俺の元に来てくれる気になったら――いや違う、さっきまでみてえに楽しく話してくれる気になってくれたら・・・連絡をくれ。一言でいい、から――待ってるからよ――な・・・？」

そう振り向かず背後の少女に語りかける。金髪の男への口調とは

正反対に。幼子が母親に許しを請うが如くの、自信無さ気なその声色――それに少女の心情が呼応する。その傷つき易く優しい男の痛い程の誠意が伝わってくる

「・・・あ、の――」

少女の返事から逃げるかのように、豪はバッグから取り出した携帯を手近なテーブルに置き、入ってきた時とは正反対の足取りで金髪の男の脇をすり抜け、大股に去っていった

「・・・大丈夫か？怖かったか？どこか痛くねえか・・・？」

豪が完全に去っていったのを確認し、金髪の男はソファに横たわる少女に身を屈めその頭に手を置く。怪我などが無いかとあちこちに触れて確認する

「だ、大丈夫・・・だよ――ありがと・・・」

少女は胸元を押さえて半身を起き上がらせる。先程無理に開かれたそこは胸を覆う生地がずれていた為だった

「・・・間に合って良かったぜマジで・・・出口でお前だった一人で奴を追い掛けて行ったからな・・・全く誰か――いや、俺を呼べよ・・・携帯は通じねえしまさかと思ったが――余り俺を焦らせないでくれよ・・・生きた心地がしなかったぜ・・・？部屋になんか入れるんじゃないやねえよ・・・全く・・・」

よくよく見れば男の額や首筋にはこの冷氣の中でも汗が流れ落ち、呼吸は荒かった。それ程までに彼は自分を心配し探し走ったのだろう

「ごめんなさい・・・」

素直に謝罪し俯く。男は少々強く言い過ぎたかと慌て、そうじゃない、無事で良かったからもういいとその肩を抱き自らの胸に抱き込んだ

「・・・怖くはなかったよ・・・あの人は――そういうことをする人じゃないって確信してたから・・・でも反省してる。今度から

は絶対気をつけるよーーごめんね・・・」

汗でシャツが張り付いた男の精悍な胸に頬を摺り寄せ、少女はもう一度謝罪する。心臓の音。常に、絶対的に自分を守り抜くその熱い生命の脈動の音。その少々早い心臓の音に先程までの混乱がゆっくりと収まっていくのを少女は感じていた

「・・・俺もそう、思っている。奴はその辺のヤローとは違う。さっきの言葉は本当だろう。お前が女だつてコトはバラさねえだろうな・・・ただ、お前余り嵌らせるなよ？あんなに何人も出てきたらどうすんだ？嵌らせるにも限度と調整があるんだよ。その辺はまだ分かつてねえな・・・」

男は少女が落ち着いた事に安堵を感じ、軽い口調でからかう

「どーせウチのオーナー、あのヤローの過去調べさせてお前をつけたんだろな。見事に嵌っちまったなアノお兄ちゃん。ありや諦める気さらさねーぞ・・・ま、俺がンなことぜってーさせねえが」

男は自分からサングラスを外し、素顔でその蒼い瞳を覗き込んだー
ー安心して綺麗に笑っている、と
安心して綺麗に笑っている、と

「・・・ありがとう・・・」

少女はその精悍な顔を見て、心底からの礼を言った。その限らない感謝をたった一言に最大限に込めた

「ーーね・・・さっきのあのステージ・・・何だっただんどう？」
ネオンに照らされた薄暗い室内で、少女は自らをその腕に抱く男を見上げた

「オーナーのあの妙なステージのことか？」

男はそう確認する。彼女が不安に思っているのはステージ自体では無いことは明白だった

「オーナーの隣に居た子ーーどうして私と同じ顔をしていたんだろっ？」

少女は先程あのクラブで、まるで人形のように瞬きすらもせずになだ立っていた。――自分と瓜二つの姿を脳裏に浮かべる。通り魔に遭ったが如くに一瞬だった。――しかし余りにも鮮烈だったその姿鏡を見ているような、しかし全く自分とは違う世界から来たような。――分からねえ。俺も何も聞いてはいなかった。――一体何処から連れてきたんだ。――？」

本当に何も聞いていなかった。男はその明晰な頭脳を買われある程度は店の経営にも関わっていた。実際株式会社化しているオーナー事務所の株もかなり持っている。オーナーは新しいイベントなどを開く時には必ずと言っていいほど男に話を通していたというのに。――全く何も聞いていなかったが、恐らくあれは店全体へのテコ入れ。明晰な頭脳は――現在のNO.1と瓜二つの美少年を入店させ競わせるつもりだろう。自分の大切な少女と正反対の彼を使つてより二人は際立つだろう。――そういう計算式を弾き出した。その太陽と月のような正反対の魅力が互いを益々光り輝やかせるだろう。太陽と月は互いの存在があつてこそ、その美しさを発する事が出来るのだから

「あの子――女の子だよ。――私と同じ」

驚愕。腕の中の少女を見下ろす。――彼女の一番の長所は初対面であつてもそれが一瞬であつても、その本性を見抜く力

「な、んだって……。？」

この少女は完璧に美少年を演じ、貴子や豪のような人間観察のプロ中のプロ以外には見破られていない。それも一つの才能であろう。あのエキセントリックな存在も美少年にしか見えなかった。女性の片鱗など一ミリ足りとも感じなかった。――自分にさえも

「本当か？アレ女なのかよ。――信じられねえが――」

オーナーは勿論知っているだろう。この少女を初めて店に連れて行った時も男装させていたが一発で見抜いた。それでも少女の才能と癒しの本能を見抜き、笑いながら「やってみろ」と一言。それをまた繰り返したというのか？それは何故だ？そしてこの少女と瓜二つ

な――美少女の正体は

「もしかして・・・私の――」

少女は施設の前に捨てられていた。「この子をお願いします」という母親であろう女文字の置手紙がたった一つ

「お前の家族は俺だろ？さつき貴子に言っただじゃねえか――兄貴だつてよ？」

少女の不安げな声色に男は満面の笑顔を向ける――もしかしたら姉妹なのかもしれない。彼女もまた母親に捨てられ、成長し姿を現したのかもしれない――この少女はNO.1になってからは頻繁にクラブの広告塔としてメディアに存在感を示している――それを何処かで見て、太陽の前に現れたのかもしれない

「・・・まあいいじゃねえか、気にすんな。オーナーが何を考えてようとアレが何をしてようと、絶対にお前は俺が守ってやる。俺にとつてもお前はたった一人の家族だよ。可愛い妹だ――あのシスコン野郎みてえなことは言いたくねえが――傍にいてくれ・・・俺に守らせてくれ――それで俺はもともと強くなれるんだ」男はそう言葉を投げかけると腕の中の華奢な体を強く抱き締めた。守らせて欲しい――お前の存在があったからこそ、自分は道を誤らずにすんだ。施設を出てその存在が身近にいなかっただけで異常な程の孤独感に苛まれ、その衝動が時には人を傷つけ、暴力に現れた――それは男の存在をネオン街で認めさせることに繋がっていたのだが

「・・・く、るしい、よ――」

余りに強く抱き締め過ぎたのか、少女が苦しそうに身を振った――この少女が酷い暴力に晒され、それを知った男は強い怒りと共に彼女を取り戻した。余りに身近過ぎて、彼女の将来の為にならないと自ら距離を取った男に状況が味方した。傷ついた少女は自らの意志で男の元に留まり依存し、ずっと共にいることを望んでくれたのだ。それは男の最も望むことでもあった――卑怯にも。余りに身勝手で、暗く――そして哀れで孤独な男の、真の感情

「・・・ごめんな」

ふつと力を抜き、身を離す。ぼんぼんと桜色に手をあて、優しく笑った。今はサングラスを掛けていないのだ。その鋭く深い蒼い瞳に宿る光を気付かれる訳にはいかないのだ。この少女は驚くほど人間の本性を見抜く力を持っているのだから

「シャワー、浴びな・・・忘れたいだら今夜の事は。店はもういいさ・・・アフターって事にしとけばいい。俺は自分の部屋に戻るからよ、明日昼飯一緒に食おうぜ」

男は立ち上がり、部屋の電気を付けるため歩み出そうとした――
そう、すべきだと

「・・・待って・・・」

その背中に――儂い声が掛けられた

「・・・行かないで――ひとりにならないで・・・」

贖罪（前書き）

キャラクター名は示しておりません。表現方法の一つとしてご了承下さい

贖罪

不夜城のネオンに照らされたりビングー採光面積が広い南向きのウインドからの多種な光は、少女の細い背中に注がれており、男には逆光になる為か少女の表情は見えなかった

「ー どうし、た・・・？」

思わず声が上ずる。その儚い声は今まで聞いたことも無いほど艶を含んでいたのだから

「・・・ひとりに、しないで・・・よ・・・」

もう一度、男にとっては魅惑的な誘い（イザナイ）としか思えない声が耳に届く

「・・・やつぱ・・・怖かったんだろ？待ってろ、ミルクでも温めて来てやつから」

男はもう一度歩み出そうとするが、強い視線を感じて止まった

行かないで欲しい

傍にいて欲しい

ー 欲しい

そう、訴えていると強烈に五感に感じるーそれは錯覚なのだ
「・・・しょうがねえな、ホラーー」

男は形容しがたい混乱のままーそれでも声は常の優しい「兄」

だー理性を強く意識しながらソファに戻り、少女を抱き締めた
「全く・・・お前昔からそうだよな。あの施設でも「怖い夢を見て眠れない」とか言って、いつも俺のベッドに潜り込んで来たよな
あ・・・夜中俺がトイレに行こうとするだけでもしがみついて来たもんなあ・・・」

努めて明るく、自らの首に縋りついて来る少女の頭を撫でる、髪を梳くー理性

だめだ

分かっている

それをしてはいけない

それをした瞬間、やっと手に入れた存在は俺から離れていく

お前が傷ついた原因は 男 だ

男の汚ねエ欲望で傷ついた お前

それにまた晒されたら お前は 今度こそ お前は

お前がもう一度離れていったら 今度こそ 俺は

壊れちまう 何もかも

「……うん……あのね、謝りたいことがあるんだ……」

少女は胸に顔を埋めながら呟く「……なんだ？と男は視線を小さな頭に向ける

「……さつき……私、嫉妬……してたんだ」

「……？さつき？何のことだ？

「あのクラブで……龍先生のテーブルで……私分かってたんだ。龍先生……貴子さんが貴方のことがとつても好きだったこと。分かってたんだ……だから……話したんだ、私の……こと」

貴子が自分と少女の関係を尋ねて来た。自分には貴子の好意は分かっていた。だがそれを受け止めることは不可能だったのだ。ただ遊びで抱くならいい、処理の為に抱くならいい。そんな女は過去幾らでもいたし現在でもいる……だが貴子は違う。真剣に真摯に自分を愛してくれた本当にイイ女だった。だからこそ受け止めることは出来なかったのだ。自分には本能から求めてしまう存在がいたからだ……如何に理性で隠そうと忘れようと捨てようと思っても、どうしてもどうしても消し去ることの出来ない存在がいたから

「だから……貴方が旨く話を終わらせてくれようとしていたのに……私昔のことを話した。私は酷い目にあつたんだよ、って……この人はそんな私を救ってくれたから傍にいてくれるんだ、私が傍にいて欲しいって思うのは当たり前でしょ？許されることでしょうって……私、最低だ……」

胸に温かいものを感じた――少女は泣いているのだろうか。自らの醜い感情の計算を、哀れんでいるのだろうか

「――私、は・・・妹」なの？」

腕の中の少女が顔を上げた――涙に潤む蒼い瞳が自分を真っ直ぐに見詰めてきた。その瞳に浮かぶ感情は

「私にとつては・・・貴方は、「兄」なんかじゃない。ずっと、ずっと昔から――「兄」なんかじゃない」

分かつている

お前が、嘘のつけないお前の綺麗な蒼い瞳が、いつの頃からかどういふ風に俺を見ていたかつてこと位は

分かつていた だが

だめだ

「――俺はずっと後悔していた。今も」

男が不意に口を開く――どこからか車のクラクションだろうか、遠くから高い音が耳に届きそれが頭の中を反響するように鳴らされている――常に理性を保っていた男の脳内は混乱し、言葉は彼の意志とは無関係に次々と発せられた

「お前に養子縁組の話が来た時――お前は貴子に言わなかったが一番賛成したのは俺だ。渋るお前を、施設を出たら・・・出来れば俺の元に来たいと言ったお前を説得したのは俺なんだ――俺の元に来ることは駄目だと、お前の将来の為にねえと思ったんだ。歳も離れているし、お前は光があたる所で、普通の女みてえに同年代の男と普通の恋愛をして・・・そうすべきだと――俺とお前は全く正反対の人種だ。いや、俺の汚エ感情をぶつけてしまうことになる――俺は逃げたんだ。お前の綺麗な瞳から逃げた。俺は弱い」

やめろ 言つべきじゃねえだろ？

止まれ 俺のこの汚エ感情に晒しちまつてるじゃねえか
だめだ 壊れちまう。折角手に入れたんだろ？

俺は今 満たされているんだろ？

「弱エ俺があんなことを言わなければ――お前はあんな酷い目に
合わなかったのに・・・許してくれ――」

そうだ 謝罪し 赦しを請え――贖罪

お前がいつか他の男の元へ行くことになっても

それまでは 俺が もう絶対に一ミリの傷もつけさせねえから

その時は 笑って 見送ってやるから

今度こそ 幸せになれ

俺はいい ここで 夜の世界で

この世界は丁度いいんだ 俺の真闇な精神を

薄汚エネオンで 照らしてくれるから

「もう金はいい。充分だ――もうあの店辞める・・・お前はもう

元の世界へ還れ」

彼女を光り輝く世界へ還せ

「――！」

不意に――柔らかい濡れた感触を自らの唇に感じた

「・・・いて・・・」

幻聴？

「・・・私を――・・・」

どうしようもない衝動が、腕の中の華奢な体をソファに押し付けた
縋り付いて来る体を強く抱き締め、小さな頭を包み、細い髪に指を
絡め――唇を深く重ねる

頭の中には耳障りな程の高音が反響し響き渡っている

――熱い、感触

「・・・やつ・・・！」

ビクン！と華奢な体が跳ね、否定の声が耳に届き意識が覚醒した――
――震えている

「……」

荒い呼吸、聞こえるか俺の心臓の鼓動が？どれだけ俺が堪えていたのかお前に分かるのか……いや、今の彼女には過去の忌まわしい記憶が蘇っているのだろう。その心を破壊されたおぞましい男の欲望の行為が……俺は繰り返すつもりなのか？欲望に傷つき、連れて帰った俺の元でどれだけお前が壊れかかっていたか、その人形のように動かなくなったお前の様を俺は覚えている。忘れることなど出来ない……いつの頃からかのお前の真っ直ぐな感情を厚いレンズで遮断し、気付かないフリをし優しい「兄」を演じ続け……これだけ少女を傷つければ気が済む？

「……す、まねえ……」

離せ……この壊れてしまいそうな柔らかい体を離せ……何度も理性が命令を下すのに、本能はそれに強く抗う。男は強く瞳を瞑り渾身の力を込めて少女から身を離そうとした……

「ち、がう……の！違う……そうじゃないよ……ただいきなりだったから……ちよつと怖かったただだよ……大丈夫だから、貴方が怖い訳じゃないから……止めないで……離さないで……一緒にいたい、よ……」

少女の高い、必死に恐怖を堪えている為か震え、途切れ途切れに発せられる言葉

「……だめ、だ……出来ねえ……出来ねえよ……」

理性。それ以上に少女を怯えさせたくない、傷つけたくない……ただそれだけの一つの強い感情

「……抱いて……」

男の強い感情すらも突き破る、真っ直ぐな瞳……＜安定＞した、やっと手に入れた信頼という世界を壊したくないという脆弱で臆病な理性の鎧は崩壊する。＜刺激＞を受け入れる、そして＜発展＞を生み出せ……＜本能＞

「……貴方が……好き……」

真っ直ぐな感情が……鎧を剥がされた男の裸の心、＜本能＞に届

いた

もう一度の接吻が男の唇に届き――その身は重なっていた

贖罪（後書き）

次のページからは少々の男女間性的描写が入りますが年齢制限描写は入りません。女性向けのソフトなものです。が、そのような表現自体が苦手な方などはどうぞ自身のご判断でのご閲覧の是非をお願い致します。

発展（前書き）

性的行為を想起させる表現を含みます。あからさまではありませんが、ご自身のご判断で閲覧下さい

発展

「少女」が「男」と同じ業界に入ったのは――貴子に話した通り、多額の負債を返却する為、そして「男」のように強くなりたかった――それは決して嘘では無かった。だが、男性の欲望に傷ついた歳若い女性がホステスならば兎も角ホストになるとは、疑問が残るだろう。しかし「少女」はホステスにはなれなかった――男性の欲望の対象になることを深層心理は強く拒否した。勿論女性、そして男性の欲望の対象になる可能性もあるホストではあるが、彼女自身の魅力はそれを殆どの客に求めさせなかった。それはあくまでも幸運であつたということと、彼女を常に守り抜く「男」の存在があつたとも言える。極稀に客からそれを求められることもあつたが「男」はそれを如才なく回避する方法を「少女」に教え、店側にもそれを承諾させた。無論それは「少女」の売り上げがバックボーンになっている。それをしないからこそ「少女」は生来の才能と、酷い暴力に晒された経験を踏み台に――本当に傷ついた人間にしか、他人の傷を敏感に察知することは不可能である、本当の「癒しの美少年」としてあのクラブでトップセールスを上げていたのだ

「男」は「少女」が夜の世界に入りたいと言いついた時勿論反対した。ある程度癒され、目を覆いたくなるような人形状態から回復した「少女」を進学させ、普通の仕事に就くことを願っていた。その為ならば自分は幾らでも稼ぐと、償うと――それでも「少女」は首を縦に振らなかつた。早く強くなりたい、地に足をつけて一個の人間として――立ち直る為に。「男」は最後の最後は「少女」に弱い。それは贖罪の意味もあるであろうが――ならばと「男」は自分と同じ店に勤めるよう提案する。あのクラブはホスト業界では最高クラスに存るし、売買掛けなどの従業員を搾取する等のシステムは無い。ある程度は経営に関わっている自分ならば特例を認めさせることも容易だ。そしてそれ以上に自分の目の届く所に置き守

ることが出来ると――

自分は寢室のベッドに横たわっている――そして視界には男がそのシャツの胸元を開け自分の上に覆い被さっている――カーテンが閉まっている為かネオンの光はそのカーテンの隙間から微かに届く程度で、室内は非常に薄暗いが――男の苦悶の表情ははっきりと認識出来た

「・・・んっ――」

接吻――深い。下唇を厚い、熱い舌がなぞり口内にゆっくりと入って来た。ぞくりとした感触が身を竦ませる――恐怖？
大きな硬い、熱い手が襟元から躊躇うように侵入してくる――恐怖？

ベルトが外され、降ろされる――恐怖！

雷が鳴ってた よく眠れなかった 施設を出て新しい環境になかなか寝付けなかったんだ

でも窓にあたる雨粒の音がずっと耳に届く内に うとうとしてきた
少し喉が渴いた なんか胸が苦しい 目を開けた

――

一生懸命抵抗しようとしたんだ でも 怖くて 怖くて

ネグリジェが破れる嫌な音

声が出ない

破かないで――貴方がお祝いに買ってくれたきれいなネグリジェだったのに
指一本すら動かせない

髪を引っ張らないで――貴方がいつも褒めてくれた髪だったのに

重い

重いよ

手を掴まないでー！ー洗い物とかしてると荒れないようにいつも貴方がクリームを塗ってくれた
息が出来ない

足を開かないでー！ー行儀の悪い私に「女の子が足を開いて座るもんじゃねえ」っていつも注意されたね

何をされてるの？私

痛いとかじゃない

混乱

哀しみ

ー！ー絶望

気持ちの悪いぬるぬるした蟲が体中を這い回って 真っ黒な蛇が私を突き刺して 何度も何度も

助けて

助けて 助けて たすけて たすけて

「いやああああ！」

叫んだ。怖い。震えが止まらない。またあれが始まるー！ー体中を蹂躪される真っ暗な記憶が強烈に蘇る。いやだ・・・いやだ！どうして私はこんな目に合ってるの？どうしてあの人はここにいないの？ずっと一緒だって言っただじゃないか！ずっと一緒に生きていこうってー！ーどうして私を突き放したんだよ？どうして私の傍にいてくれないんだよー！ーどうして、どうしてー！ー

「俺はここにいます」

耳に届くー！ー物心ついた時からずっと耳に届いていた優しい声

お前を守るのは俺だ

と、いつも少し乱暴な言葉だったけど、いつもいつもその言葉の裏にはその感情が痛い程、哀しい程伝わってきた

「お前を壊す男は何処にもいない。俺はお前を守る男だー！ーだから、安心しろ」

私の意識は外界に反応するー！ー子供に、かつての記憶に意識を侵

食されていた

「もう二度とお前の傍から離れねえーずっと一緒に生きていく」

何度も何度も貴方は私を突き放した。年齢とか、人間の種類が違うとか、私の幸せの為とかー色々な理由で。それでもずっと見守っていてくれたーそれがどれだけ私が辛かったかわかるの？突き放すくせにそんな哀しいほどの瞳で感情を向けられている私がどんなに辛かったか。諦めようと、貴方が望む通りに離れて他の世界へ行こうと思ったってもう無理だよ。私は貴方が

「今までーすまなかった。だがもう・・・俺はお前を突き放さない。ろくでもねエ臆病な俺だが勇気つてヤツを出す・・・二度と離さない」

抱き締められるーそれだけで、もう今までの事なんてどうでも良くなってくる

「愛している」

ひとことーそれだけ

子供の私ー大人の男性に手を引かれ笑顔で見送る少し若い貴方。何度も何度も振り返った。止めて欲しいと。やっぱり行くなと言つて欲しかったあの時ー私も臆病だった。貴方が何を思おうと自分の感情を伝えれば良かったんだね

「・・・私も・・・愛してる・・・」

子供の私は泣いている。怯えて小さくなってただ泣いている。震えてただ傷に泣いているーどんどん遠くに離れていく。やがて消えていく瞬間ーぱっと顔を上げて私を見たー笑顔

じゃあ 私行くな 自分の感情を 伝えられた貴女には もう
私は要らないよ

子供の殻を被って生きてきた私。でももうそれは要らない。一個の男女として愛し合うことを選択したのだから
広い背中にー手を回した。震えの止まった手を

男には分かっていた。予測は容易だった――少女が怯えること。過去の忌まわしい記憶を思い出すであろう事を――だからこそ苦悩した。だからこそ彼女が如何に望もうと煩悶した壊れてしまうのではないだろうか

その体が 精神が

彼女を喪ってしまうのではないだろうか

だが今彼女は自らの意志を自分に伝えてきた。過去の記憶を思い出し、それに苦しみ――それを乗り越えて愛してる

と自分に伝えたのだ。震えの止まった手が自分に縋り付いて来る。そのどこまでも美しい蒼い瞳が見詰めてくる抱いて欲しいと

過去の、子供の自分から<発展>する為に

大人になる為に 本当に強くなる為に 一個の人間になる為に
ならば自分も乗り越えるのだ。彼女を人間にする為に、そして限りなく臆病であった自分が強い――人間になる為に

「！」

シャツをはだけさせた胸元――厚い生地をゆっくりと外すと、豊かな膨らみが現れた。それに非常に男は驚いたいつの間に

こんな「女」になっていた？

幼い頃、多忙な施設の園長の手伝いもあって男は少女を何度も風呂に入れた。それは彼女が初潮を迎えるまで続いていた。あの頃の彼女の胸は平らで、腕も足ももっと痛々しい程細くて――いつの間にこのような「女」の艶を持ち得た？男の記憶の中では少女はあくまでも「少女」だった。あのクラブに勤めるようになり、胸を強く厚い生地で覆っている少女に男は注意した。ちゃんと下着をつけなければ体に悪いのではないかと。少女はこれ以上大きくなったら

誤魔化せないと笑って拒否した

部屋にいる時位下着つけるよ。形崩れっぞ？

だってこれ以上大きくなったら誤魔化せないもん。少しでも押さえとかなきゃ

何言ってるんだ？お前の胸は誤魔化せない程ねえだろーが

そんな風に軽口で笑い合ったこともあった。しかし眼下の膨らみはどうだ？小振りであるが形の良い紛れも無い女性の膨らみ。くびれた腰、髪が生え際の首筋――全体的に丸みを帯びたその華奢な体は記憶の中の少年のように直線的な細い体ではなかった

「・・・そ、んなに――じつと、見ないで・・・よー」

余りに凝視していたので少女は恥ずかしくなったのだろう。薄暗い室内でもそれははつきりと男の視界に認識できる。その言葉に彼の意識は覚醒し、まるで禁じられているものを触れるかのような――罪悪感と好奇心に近い感情のままその胸に手を伸ばした

「・・・」

非常に柔らかく、自分の大きな手には完全に隠れる――少しでも力を入れたら潰れてしまうかのようにそれは脆かった。それでも張りのあるそれは自分の指を押し返すように――

「・・・っ――！」

どうしようもなくそれに接吻付けた。弾力のある皮膚を唇で愛撫した。先端を口に含むと華奢な体は弾け、息を詰める様な声が漏れる

――嬌声

「・・・ん・・・んっ・・・」

夢中でそれに愛撫を加え、もう片方を指で擦る。潰れないように、壊さないように――先程までの頭の中の高音は収まっていたが、代わりに火傷しそうな程の熱が男の体内に渦巻いていた

男は 興奮していた

「・・・は、あ・・・」

胸から唇を離し、鎖骨に軽く歯を立てその柔らかそうな首筋を味わった。非常に優しく穏やかな甘い匂い――女の匂いだ

「あ！」

その手を下腹部を覆う下着に掛けると少女は高い声を上げ、その身を硬直させた

「・・・大丈夫だ・・・怖くねえよー」

自然に言葉が出た。彼女は処女と同じなのだ。過去の忌まわしい記憶から、それ以来男性を完全に忌避していた筈だ。恐らく自粛行為すら忌避すべきものだったろー性的行為・性的感覚に対する嫌悪感。それを払拭してやらねばならない。これは嫌悪すべき感覚では無いと

「くっ・・・」

私は歯を食いしばり顔を背けた。胸や首筋に感じるじんわりとした感覚。決して思い出たくないあの夜に感じた感覚とは全く違う。あれは蟲が這っているかのようにただ気持ちが悪くて止めて欲しくてー今は違う。もっととして欲しい。もっとと私に触れて欲しいーがいい？これが、愛情？同じ行為でも本当に愛している人に触れられるならこうまで違うものなの？

ー待つて いけない

私は今日ー

「・・・ゆっくり、するからー力抜いて息吐きな・・・」

下着を慎重に脱がせた。非常に淡い陰りが彼女の幼さを現しているー溜息のような呼吸を吐く。指をその裂け目にあてービクンとまた怯える体を抱き締め、耳に言葉を吹き込むーそこは勿論濡れてはいなかった。彼女の肉体は快楽というものを初めて知るのだ。そこが反応していないのは当たり前だ

「・・・だめっ！い・・・た・・・あ・・・」

探るように指を侵入させた。彼女は予想通りに苦痛を訴えた

「う・・・んっー」

彼女の様子を見ながら指を動かす。もう止めることは不可能だった。

彼女は否定していないのだ。ただその身体的感覚を否定しているだけなのだ。ならば止める訳にはいかない――それが彼女の望みのだから

「・・・大丈夫か？余り我慢するなよ？唇切れてんじゃねえか・・・そんなに強く食いしばるな・・・」

彼女の背けた唇に血が滲んでいるのが分かった

「・・・ちが・・・私、今日はまだ――」

指が紅く染まっていた――彼女は今日月経周期の終わり――だったのだ。用心の為の薄いライナーにそれは全く滲んではいなかったが、内部に入り込んだ長い指にそれは色をつけた――それを女性として恥じているのだ

「・・・構わねえよ――女なら恥ずかしいだろうが、俺は構わねえ」

本当にそれは気にならなかった。彼女は勿論恥ずかしいだろうが――一種の倒錯感が男の全身に湧き上がった。この紅い血は破瓜の血だ。俺はこの女を初めて抱く男なのだ――と

「・・・だ、だって――いい、の？きもち、悪くないの――？」
震える涙声が耳に届く。余りにもいじらしい、少女らしい言葉。その不安げな表情

「愛している女だ。何だって構わねえよ。大丈夫だ・・・」

その優しい響きの言葉に、少女は未だ恥ずかしそうであったが一つ頷いた

やがて――男は既に熱く膨張した自らをはだけた少女の瞳が、最後の恐怖に見開かれる――

ふたりで ひとつ（前書き）

性的行為を想起させる表現を一部含みます。あからさまではありませんがご自身のご判断でご閲覧下さい

ふたりで ひとつ

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・」

目を見開き硬直している少女。見開いた瞳は男のそれを凝視している

「・・・・怖い、か？」

男の押し殺したような声が少女の耳に届く

「・・・・・・・・い・・・・・・・・」

少女の震える唇が弱弱しく――二三度縦に動く

「・・・・・・・・そ、うだ・・・・よな――」

儚く怯えるその華奢な体。過去彼女はこのようなように怯え震え――傷ついたので

傷つけたくねえ

抱きたい

怯えさせたくねえ

抱きたい

泣かせたくねえ

抱きたい

苦しませたくなんてねえんだ

そんな表情絶対にさせたくねえのに――俺は一体何してんだよ

男の欲望に晒された少女が最後に見せた恐怖に、男の最後の理性が発動した

――その瞬間

「・・・・怖いけど――イヤじゃない、よ・・・・」

聞き取れないほどの儂い言葉

怖いけれど

とても とても 怖いけれど

本当に 本当に イヤじゃない
だから

男は息を詰めた――何か言葉を言うべきなのだ。これほどまでに自分のような男に対して美しくいじらしい感情を向けてくれる腕の中の少女に。痛々しい程の覚悟でその言葉を与えてくれた彼女本来の優しさに

「――」

言葉が出ないまま、喉が詰まったような身体感覚のままの男の先端が、少女の入口にあてられた

「・・・」

少女の名前を呟くことしか出来なかった――それでも全ての愛情をその言葉に込めて

「――う・・・」

苦痛の表情。背けた顔。額に浮かぶ汗。シーツを強く掴む細い指。浮かんだ足は反り、強張る

「・・・い、た――い・・・」

呼吸が旨く出来ないのだろう。実際少女のそこは男の長けた性技にも関わらずやはり殆どの反応は無かった。だが男は舌技などは使わなかった。そのような行為は、性的行為に強い嫌悪感のある処女には忌むべきものだろうと考えたのだ。排泄行為を行う部分に食物を摂取する部分が触れる――そのようなことをすれば、恐らくそのようなことをされたであろう過去――忌まわしい――記憶がまたもや浮かぶだろうと。清らかな処女がそのような行為を何の知識も覚悟も無くされた――メディアに氾濫する女性の反応などは現実にはあり得ない――どれだけそれは辛かっただろうか

「――く・・・う・・・うー」

ゆっくりと、それを侵入させる。体格に比例するその巨きさは、ただでさえ困難な挿入行為を更に困難なものにさせる。少女の経血――それを潤滑油にし、全てを収めた

「・・・もうー止めねえ・・・からな」

熱い呼吸と共に低い声が苦痛の表情に投げかけられる

「もう止めねえ。俺はお前を愛しているー愛している女を抱きたいんだ」

きつく閉じた瞳に滲む涙を唇で拭うように触れさせながら、男は先程までの自信無さ気な声とは正反対の強い口調で言った

「だから、このまま抱く」

少女の小さな頭を両手で抱え込み、首筋にあてさせる。その食いしばった唇を押し付けるように

「食いしばるなら、傷つけるならー俺を傷つける」

男は、自分が少女に与える「本能の傷」をー自分にもつける、とーそう、言っているのだ

「お前の苦痛を俺にも寄越せ。全て寄越せー」

動き出す。その本能のままにー激しく、何度も何度も何度も何度も

もう 止まらない

止めない

陳腐な言葉だが これしか言えねえ
「愛している」

お前の淡い色合いの細い髪

折れそうに華奢な体 だがひ弱な訳じゃねえ 健康的な瑞々しさに満ちている体

白い手足 小さな唇 高く元気な鈴のような声

小さな顔 強い光を放つ大きな蒼い瞳

何よりもその素直で明るい性格

嬉しいんだよ 俺は すっげえ

同時に苦しいんだ すっげえ

愛しているお前を苦しめてるから 途轍もなく苦しいんだ

分かってくれ 頼む

その苦痛は お前が俺を愛しているから生じるものだ
それは 愛し合っているからこそだと

繋がった部分から伝わってくれ

――伝えたいんだ

何をされているかは、分かった

あの時は何をされているのか全然分からなかったけど
今は、分かる

貴方の体が私の体に入ってきて、それが何度も何度も出たり入ったりしているんだ

痛い すごく 痛い

嬉しい すごく 嬉しい

伝えなきゃ、私が嬉しいってこと。私が痛がっているから貴方はすごく心配して、そんな辛そうな表情をしているんだもの。伝えなくちゃ――貴方と一緒に、一つになれたことが嬉しいって

「――っ……」

でも、声が出ない。どうして？どうして？声を出したい。私の気持ちを伝えたい――思わず、押し付けられている首筋に歯を立てた。何でそんなことをしたのだろう――瞬聴こえる貴方の苦痛の声「そ、うだ――俺を傷つけていい……もっと傷つける――それでもいいんだ」

何がいいのか分からない。もしかしたら貴方は私がただ苦しいのか思っていないのかもしれない――違うよ――違う

「……う――の、に――」

貴方の精悍な体 汗が浮かぶ筋肉 大好き

長い手足 大きな手 太い首 大好き

厚い唇 無精髭も 大きな耳も 高い鼻も 大好き

とっても鋭くて怖いのに すっごく優しい深い瞳 大好き

全部 全部 好きだよ

――伝えたいのに

「――！！」

体の奥の奥――を圧迫された。喉の奥から何かがせり上がってくるような感覚

「・・・ク・・・ッ・・・」

また、貴方の声。押し殺したような、くぐもったような低い低い声
「――もう――終わる・・・」

終わる？終わってしまったの？

痛みなんて 構わないよ

貴方と離れたくなかった

ずっと一緒にいたかった

物心ついた時からずっと望んでいたふたりつきり

やっとうとつになれた

ひとつだよ わたしたち

ふたりで ひとつ

痛いけれど 嬉しいんだよ わたし とっても

分かって お願

愛してるから 嬉しいと

繋がった部分から伝わって欲しい

――伝えたいの

ふたりで ひとつ

少女から女へ（前書き）

最終話になります。読んで下さってありがとうございました

少女から女へ

世界有数の歓楽街・ネオ新宿歌舞伎町――

その華やかなる一画に、周囲の絢爛たる店々を圧する店構え――
ネオ歌舞伎町一のホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」

美しきセレブ女性達の、金だけでは埋められない心の隙間を慰める、
美しき男達の集う夜の宮殿

「おはようございますNO.1。一週間振りですね、ご体調はいかがですか？」

ロッカルームから出てきたNO.1光に小千が話しかけてきた
「おはようございます小千さん。一週間も休んでいてすみませんでした。もう風邪は治りましたので宜しくお願いします」

光はぺこりと頭を下げると、にっこりと笑う

「こちらこそ――全くこの一週間は大変でした。貴方ばかりか、NO.2までもが法事とやらで一週間いらつしやらなかったのですから。クラブの華がしおれていては困ります。体調管理はしっかりと――あなた方がいらつしやらない間、オーナーは月弥さんをメディアに非常に露出させました。華が無いクラブなどただの空間ですからね。彼は今日が初出――既に何組もの指名が入ってます。貴方も負けてはいられませんか」

小千は何の意図か――その眼鏡の奥の瞳を細めて光を見る

「そうですね。あの方はとても魅力的な方ですよ。はい、私も負けません。頑張ります」

ウィルス性の風邪ということで一週間休んでいた光の出勤の日。光もまた何組もの指名が入っている――今日は忙しくなるだろう
「……何故でしょうか。貴方はお変わりになられたようですね」

その強い光を放つ蒼い瞳に――小千は微かな驚愕を覚えた

「――変りましたか？私」

再度――太陽のような笑顔で小千を見上げる

「――ああ、伊勢教授がバー・カウンターにいらしてますよ。貴方とお話しされたいと。場内指名という形です」

「え？伊勢教授が？――何故でしょうか？あの方は……」

光は少々驚きを持って答える。勿論何度か挨拶を交わした事はあるが、彼はどちらかといえばこのクラブをその研究の為の社交場として来店しており、来店したとしても特に誰かを呼ぶようなことも無くオーナー等と話すだけ――一体自分に何の用事だろうか

「さあ、私如きには分かりませんが――ご同伴のお客様のテーブルの前に行くようにと、オーナーからの伝言です」

オーナーの意図なのか。ならば行かねばならないだろう

「はい、分かりました。すぐに――あ、小千さん斎社長のテーブル――」

「既にヘルプの手配は済んでおります。私も参りますので、どうぞお気になさらずにいつてらっしゃいませ」

流石に小千のホール手配は完璧だった。斎は大丈夫だろう

「いつてきます」

もう一度笑って――ホールへと向かう小さな背中を見ながら小千は穏やかに微笑んだ

「いらつしやいませ、伊勢教授――ご指名ありがとうございます」
バー・カウンターにはGeorge Winston「Longing/Love」。常のジャズではなくNew Ageが静かに流れ、まるで何年も前からそこにいたかのような初老のバーテンダー、そして伊勢が一人、座っていた

「こんばんはNO.1。どうぞ座って下さい――何か飲み物を？」
珍しいこともあるものだ――伊勢は上機嫌で嬉しそうに笑っている

るのだ

「はい・・・あの、失礼ですが何か楽しいことでもあったのですか？教授はとても嬉しそうですね」

不機嫌ではないが常に深淵なる無表情を保っていた彼が笑っている――まるでお気に入りのおもちやを与えられた子供のように

「ええ、とても嬉しいですね！このクラブは私の経済論を完璧に立証させたのですから！」

おやおや――既に彼は光を見ていない。細い顎を上げ、掌をオーケストラの指揮者のように広げ天井を――どこか遠くを見ているようだった

「完全なる競争原理に即した、完全なる陰陽原理に即した、完全なる本能の経済世界――素晴らしい・・・」

初老のバーテンダーは黙って光にレッド・アイを差し出す――その意味は？

「教授の精神的経済世界――というアイロニーな論文ですか？」
光は少々苦笑しながらも、レッド・アイを軽く伊勢のアイス・ジャスミンのグラスにあててそう応える

「え・・・？ああ、貴方は中々のIQをお持ちのようだ。私の論文を一言で表現する力を持っているんですね・・・中々興味深い。今度私の研究室においでなさい。オーナーが仰ってましたが、貴方は心理学に興味があると伺っている――私の専門は経済学だが、経済の根本は競争精神を持った人間。その人間の心理の研究はまた私のテーマの一つですよ。聴講生としてもいいし――」

確かに心理学には興味がある。男の強さを手に入れたいと少女は常に願っていたから。力だけでなくその精神的な強さも――様々な専門書を時間を見つけては読んでいたが――オーナーは何を考えている？豪のようにまた伊勢も――？

「経済論は状況研究ですよね？」

そう質問された伊勢は益々の笑みを浮かべる

「そう、私は状況観察のプロです――だがその根本の人間観察の

プロも目指しているのです。私はその為に励んでいる。それこそが私が生きる全て。人間ほど魅力的な研究対象はありません」

アルコールは入っていないようなのだが、どうも伊勢は酔っているような気がする。アルコールには無く――状況に

「さあ、これからこのクラブは益々の発展をしてゆく――太陽のような貴方と正反対の冷たい光を放つあの――」

伊勢はゆっくりと背後を振り返る――ホール中央

「月の存在」

光は視線を感じた。冷たく凍った視線を

濡れているかのような艶を放つ黒髪、硝子のような紅い瞳、透明な肌――先程ロッカールームで見掛けた、何故かNO・4がその隣にいて困惑したような表情で必死に話しかけていた。それを冷たくあしらうように自分に歩み寄ってきて一言

「私はお前にしか興味がない」

ホール中央、小さく華奢な体というのに異常な程の存在感を放つその黒い存在。それが自分を真っ直ぐに見詰めている――触れれば斬れる、凍った氷の瞳

「・・・・・・」

自分がいなかった一週間で――クラブ内は確実な変化を遂げていた

「NO・1――貴方はこれから変化してゆく。今までは競争対象がいなかった為停滞していた。売り上げという意味ではない。ある意味自分自身を見せ付けられ、それを乗り越えようとしてゆくでしょう」

バツ――伊勢が両手を広げる。指揮者がラストを飾るに相応しい手つきで

「素晴らしい夜だ。素晴らしい世界だ――素晴らしい人間！」

完全に伊勢は自分の世界だ。勢いよくグラスを空けると金を置き、常のように飄々とバーから出て行ってしまった。バーテンダーは無

表情でグラスと明細を下げる

「・・・・・・」

刺激を受け変化する世界。変化し発展する世界。素晴らしき人間の
歡喜憎惡欲望渦巻く、混沌の競争世界――

「・・・・どうした？」

店が終わり――長い腕に抱かれながらマンションまでの道筋を歩いた

「うん・・・凄かったね、あの子――凄いや」

黒い美少年の人気は凄かった。彼――彼女は殆ど喋らないようにただ静かに客の前に座り、無表情で存在している。それでもその瞳は客を真っ直ぐに見詰め――恐らく小千が暫く担当するのだろう。小千が次の指名テーブルへ促すまでじっと佇んでいるのだ。客は酷く落胆の表情を見せる。私が好きなのではないのかと、何故行くのかと。そこまで何でも与えているくせに何故自分を置いて行くのかと――まるで客は子供だ。どうにかしてこの凍った無表情を自分の思い通りに変化させたいと躍起になっているようだった

「・・・・そうだな・・・ありや、売れるぜ。俺もこの商売は長いがあんなタイプは初めてだな」

それでも氷の微笑を向けられただけで客は凍る。全て計算の内なのだろうか。誰も帰らない

「・・・・負けたく、ない」

男は少々の驚きを持つ。少女がそのような感情を表に出したのは初めてなのだから。そのような感情があったのだろうか――彼女は変わっていく

「・・・・がんばれや。どうせやるなら徹底的にトップを目指せ。出来るだけ協力してやつから」

一個の人間として地に足をつけ歩いていく少女。彼女の後ろに道は

無く、ただ前にあるのみ――その事実に一抹の不安と寂しさを感じながらも、それは正しい、当たり前のことだと男は認識する
それが、成長を繰り返す人間本来の姿なのだから

「――寒い、ね・・」

粉雪がちらついている。かなりの冷気だ。その言葉を聞いた男は自らの胸に深く、小さな頭を抱き込んだ

「何か食べて帰るか？あつたけえモンでも――」

――？少女の小さな手が男の骨ばった指を掴んできた――強く
「.....」

小さすぎて聴こえない、言葉。俯いている少女の顔は紅潮している
――クツ・・と男は笑った

「――いいぜ.....？これから俺があつためてやるよ.....」

初めて少女を抱いた夜――それから一週間男はマンションに籠り、昼夜となく少女を抱き続けた。店には適当な理由をつけた。それは勿論彼があ店の経営に深く関わっているからこそ可能だった処置だ。喉が渴けばペットボトルの水を口移しで飲ませ、レトルトフードを食べさせ、意識を失えばシャワールームへ運び清潔に保つ――一週間掛けて男は<少女>を<女>にした

「.....ん.....なに、か――ヘンな.....感じが.....す、る――」

腕の中で困惑の表情を浮かべる<少女>

「.....こ、わい.....」

全く意味の違う、恐怖

「大丈夫だ、怖くねえよ.....普通のことだ――」
<女>ならば

変化――発展には常に恐怖がつきまとう。それを乗り越えてこそ完成した人間に近づいていくのだ

儚く脆いく少女>はく女>へと美しく成長――発展した
余りにも辛い経験を乗り越えて、限りなく美しく
これからもずっと 美しくなり続けていく
愛する男と共に ずっと 永遠に一緒に

幸福に

終

少女から女へ（後書き）

本編はここで終了となります。

イラストなどをサイトに掲載しております（PC対応のみ）

<http://fr5jwdac3.x.fc2.com/aaaindex/hosutotop.html>

続編は性的描写を多く含んでいる為番外（18禁）として掲載させて頂いております

「一週間の空間」光サイド<http://syosetum/pc/main.php?m=w1-4&ncode=N6479D>

「月」月弥サイド長編<http://ncode.syosetu.com/n9349d/>

読んで下さってありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4852d/>

ホストクラブ「Y a m a t o - n a d e s h i k o」

2010年10月25日19時43分発行